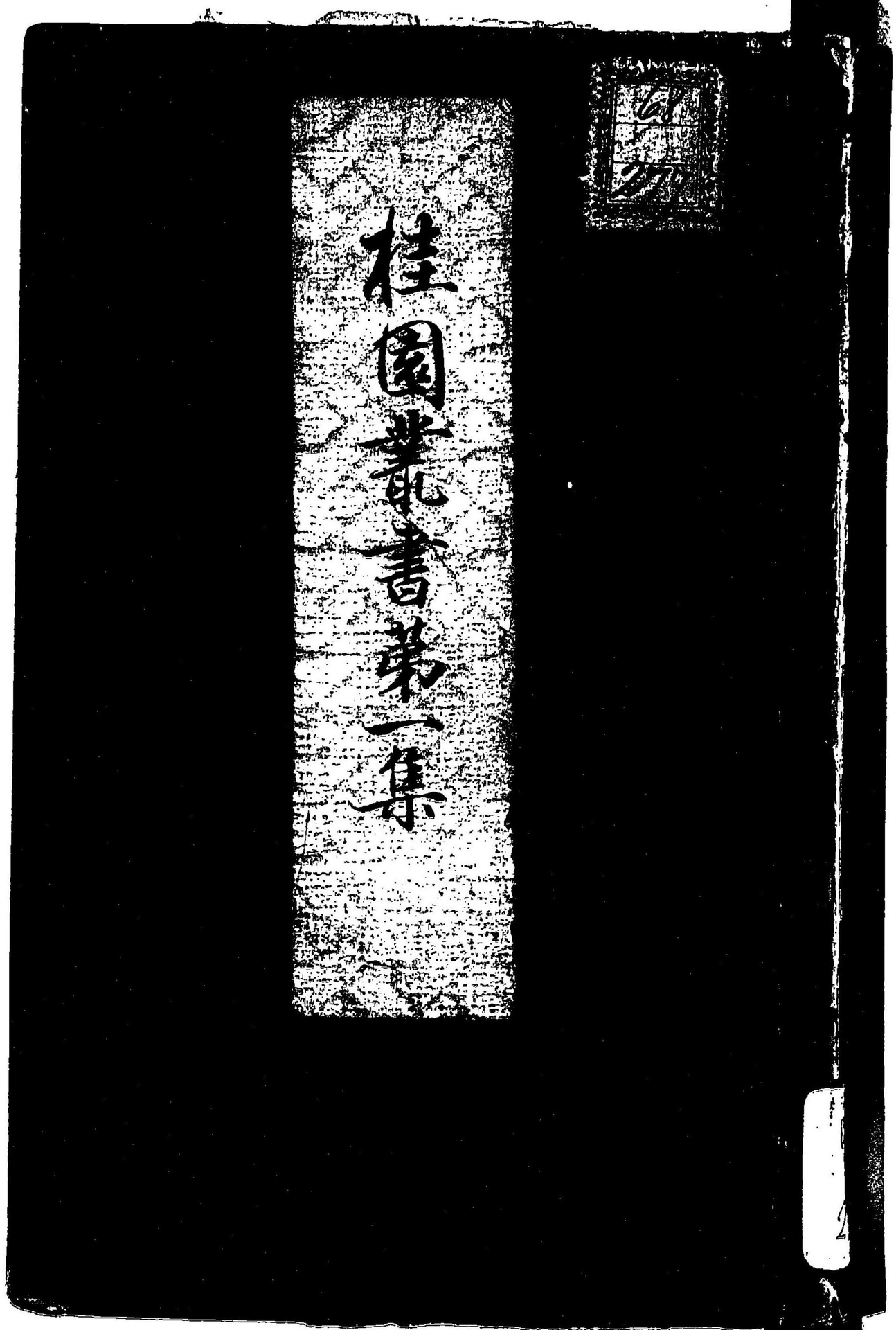
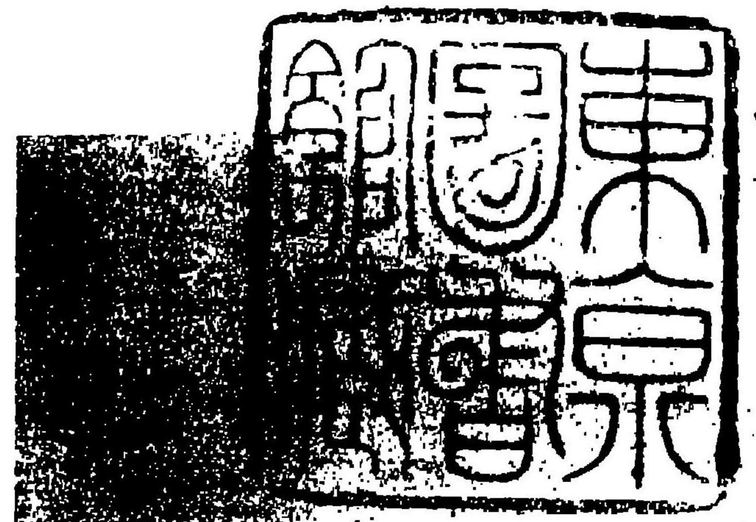


310601－000－0

68－277

桂園叢書
第1集

井上 通泰 著



A 8/620/XXV.

小川一眞寫

桂園叢書第一集

はしがき

香川景樹大人幷に其門下の人々の著書歌文、又は此人々にかゝはれる他人の著書歌文の、いまだ世に出でざるがいと多かるを、桂園派を慕ふ家々には寫傳へてひめもたるものから、ともすれば散失せなんとするを、年ごろをしきことよ思へりしが、今年は大人の五十回忌よ當れば、俄に思立ちて、これらの書どもを集めて、桂園叢書と名づけて、茲よ板よ上することゝはなりぬ、もとより利のためよものする業にあらねば、幸に此書世よもてはやされて、若干の剩金を獲ることあらば、大人幷よ人々の墳墓の修繕の料、または彼古今集正義を木板にもせんをりの料にあつべきことを、かねて誓ひおくになん

明治二十五年六月

井上通泰誌るす

桂園叢書第一集目錄

桂園叢話第一篇
袖くらべ
筆のさが
桂園一枝拾遺評
眞間紅葉見の記
歸國日記

井上通泰編輯

桂園叢話第一篇

桂園叢話第一篇

はしがき

我始めて桂園一枝を讀みて、桂園派の人々の事蹟を探らん志を起し
しは、實に明治二十一年八月なり、それより身をこれに委ぬる事茲に
四年、中ごろより志を同うせる人々の助を得て、遂に桂園叢話を出だ
すに至りぬ
知れたるは瑣事と云へども記さゞるを得ず、大事といへども知れざ
るは記すと能はず、されば記事の權衡きはめて惡く、文章の風致をい
たはることを得ざるは、獨我オの鈍きが爲のみにもあらじかし

明治二十五年五月

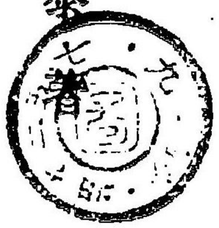
井上通泰誌るす

桂園叢話第一篇目錄

香川景樹
桃澤夢宅
赤尾可官
中川自休
氷室長翁
兒山紀成
內山具弓
山田清安
山田歌子

桂園叢話第一編

井上通泰著



香川景樹（かげしげ）桂園、桂園、桂園東屏亭の諸號あり、又香川家の號をつぎて梅月堂ともいふ。侍大夫家の匠なり

鳥取藩の藩士林善太兵衛の二男なり、若うして京師に上り、鷹司西洞院等の門に入りて和歌の師香川景柄（カゲトモ）の養子となりて、德大寺家に仕へぬ、後養父と道の上の意見合はずして、分れて一家を成しゝが、なほ香川の氏をなのり、且德大寺家に仕へたりき、叙任は左の如し

享和三年二月二十三日、從六位下に叙せられ、長門介に任ぜらる、此時年三十六

文化八年十二月五日、從六位上に叙せらる、此時年四十四

文政二年八月十九日、正六位下に叙せらる、此時年五十二

天保十二年六月十四日、特旨を以て從五位下に叙せらる、此時年七十四

同年十月六日、肥後守に遷る

明和五年四月十日鳥取にて生れ、天保十四年三月二十七日京師にて卒す、年七十六、二條川東、東寺町開名寺(一名大炊道場)なる香川氏塋域の後に葬られぬ、法名を實參院悟阿在焉居士と云ふ、子景周(後に景恒と改む)家を嗣ぎぬ、後吉田家より桂園靈神の號を贈られ、次で靈社に進められぬ

歌は、國にありては清水貞固に學び、京に上りては香川景柄に學びしが、後に新に一派を開きぬ、弟子いと多かりし中にも、熊谷直好、木下幸文、菅沼斐雄、僧玄如、僧亞元、高橋殘夢、赤尾可宣、中川自休、兒山紀成、穗井田忠友、八田知紀、渡忠秋等最秀でたり、歌の巧拙は既に世評あり、我輩の言加ふるまでもなし、固より一派を開きし人なれば、發明の說少からず、そが中にも殊に、歌には調の貴ぶべきことを唱へ、常に弟子を誡めし語に、歌はたゞらぶるものなり、ことわるものにあらずと云へり

家は三條木屋町高瀨川の傍と、洛東岡崎村とにありき、彼を覗鶩亭と云ひ、これを東塢亭と云ふ、妻を包子(かねこ)と云ふ、鳥取の人滝川某の女にして、山崎の祠官松田秀明の養女なり、文政三年三月十二日歿す、年五十三、法名を觀水院生一蓮上大姉といふ

著書の板に上れるは

古今集正義　九卷(四季の部)
百首異見　五卷
土佐日記創見　五卷
新學異見　一卷
歌文の板に上れるは
桂園一枝　三卷
桂園一枝拾遺　二卷
桂の落葉初篇　二卷
桂の落葉二篇　二卷
書鳥の波　二卷
景樹大人遺文　二卷
中空日記　一卷

まだぬ青葉　一卷
六十四番歌結　一卷
薄氷　一卷
桂花餘香　一卷
いまだ板に上らざる著書歌文は
古今集正義(戀雜の部)
萬葉摺解
活言考
古事記新疏
三十六人集抄略解
をり〳〵草
道の記、日記、詠草の奥書、歌結の判あと

出處目錄

桂園派の著書歌文

大人の弟林半兵衛の孫林捨氏幷に大人の兄林善太兵衛の曾孫桑原享氏の物語、井上宗靜氏聞書(井上氏より送られつる)

京都の人三善茂淳氏物語、瀧川龜太郎氏聞書(瀧川氏より送られつる)

入門名簿、文政十一年正月より天保七年五月までの分(宇佐美祐次氏より送られつる)

松波資之翁物語

德大寺家記錄(松浦辰男氏より送られつる)

聞名寺過去帳

松田氏碑文

いまだ事實を攷へ得ざるもの

野史(飯田忠彥著)に云はく、小字銀之助、甫三歲善讀文寫字、爲姨婿奥村氏養子、名純德、更宇具十郎、七歲詠和歌、問儒於堀南湖、十八歲請父母適京師、後遷長門介改今名

傳說の誤れるもの

野史幷に古學小傳(清宮秀堅著)に、景樹の父を荒井某とせるは誤にて、實は林善太兵衛なり、林氏の系譜は左の如し

- 林善太兵衛 七世
  - 景樹
  - 善太兵衛 八世
    - 女 女 女 女 男
    - 孫 桑原享 現存
  - 女 現存
  - 半兵衛 九世
    - 善衛 十世
      - 捨 十一世 現存

徳大寺家記錄に、景樹をかげしげと訓じたり、されど自書きしものにかげきと假名書にせるもある由なれば、後にはかげきと云ひしならん

野史に、寛政八年に景樹從六位下に叙せられ陸奥介に任ぜられしと記せるは誤にて、そは養父景柄の叙任なること、徳大寺家記錄に明あり

野史に、景樹の法名を實景院とせるは實參院の誤なり

古學小傳に、景嗣を景樹の子とせるは誤にて、景樹に代りて景柄の養子となりし人あり、又景嗣の通稱木工を松工と誤れり

景樹の卒せし日を徳大寺家記錄には三月三十日とせり、こは公の届出にて、實は三月二十七日なり

卷首に掲げたる景樹の像は、大人の孫秀五郎氏より聞名寺へ寄

附せられし幅の寫なり、筆者の名は見えず、但氷室家の舊臣豊塲俊造氏の物語に、其主家にも、今は知らず、これと同じき幅ありて、其筆者は浮田一惠なりと云

桃澤夢宅（むたく）

景樹の友なり、初の名は正衛（まさひろ）、晩年薙髮して夢宅と改む、茂兵衛と稱し、啓山又振思亭と號す、又師の號を繼ぎて垂雲軒といふ、信濃國伊那郡梅戸郷の名主なり

歌を洛東岡崎の僧垂雲軒澄月に學ぶ、弟子中最秀でたるは宮下正岑なり、愼平と稱し自然亭又朗解主人と號す、同國同郡飯島の人なり

澄月年老いて後、夢宅を呼び登せて其跡を繼がゝむ、此時夢宅年六十に近かりき、さてありし事五六年にして、斧木と云へるものに垂雲軒

を譲りて、享和元年九月に國にかへりぬ
文化七年に歿す、年七十三、墓は同村西岸寺にあり
著書は神樂催馬樂釋義一卷あり、家集を夢宅和歌集と云ふ、ともにいまだ板に上らず

出處目錄
桂園派の著書歌文
大人の玄孫桃澤重治氏物語

赤尾可宮(よしたか)
景樹の弟子なり、通稱を初は左京と云ふ、柏園と號す、瀧口の官人にて、林丘寺宮の家司たり

從六位に叙せられ、左兵衛權大尉に任ぜらる
寶曆十四年五月を以て生れ、嘉永五年二月を以て歿す、年八十九、墓は京師二條通、川端東、寂光寺にあり
著書は田舍問答と云へるあり、其中の一節を私に板に上せしかども世には出ださず
壯きはどは專武藝を學び、傍伊勢流の諸禮を習ふ、歌は初閑院一品彈正尹宮に學ぶ、林丘寺三世入道女王より、同宮家臣の詠草に限りて添削をなし、且毎月兩度歌の會を開くことを命ぜらる

出處目錄
桂園派の著書歌文
大人の孫赤尾可功氏覺書(井上宗靜氏より送られつる)

中川自休（じきう）

景樹の弟子なり、初の名は長員、晩年薙髪して應然自休と改む、望南亭と號す、有栖川宮の諸大夫なり

近衛家の諸大夫進藤丹波守入道長興の四男にして、有栖川宮の諸大夫中川河内守晟章の養子なり、陸奥守出羽守を經て、寛政十年二月十五日刑部權少輔に任ぜられ、後少輔に遷る、文化六年四月一日東宮陳頭に任ぜられ、同じき十三年十二月二十一日從四位下に叙せらる、翌年七月十八日薙髪す

安永七年八月十八日を以て生れ、天保十二年八月二十日を以て歿す、年六十四、墓は京師千本頭十二坊中願明院にあり

洛北平野に住す

著書には大幣（オホヌサ）一卷、望南亭筆記あり、又詠草二卷あり、大幣のみ板に上

れり

出處目錄

桂園派の著書歌文

大人の孫中川長正氏覺書（松浦辰男氏より送られつる）

氷室長翁（ちやうをう）

景樹の弟子なり、初の名は豐長（とよをさ）、晩年薙髪して長翁と改む、通稱を初は兵治といひ、後に兵庫、伊織、將監と改む、椿園と號す、尾張國津島神社の神主なり

尾張藩士松井小十郎弘喬の二男なり、文化四年年二十四にして、同國海東郡津島神社の神主氷室勘解由種長の養子となり、其女陳子を娶

り、職を嗣ぎて、同郡向島村一圓千二百九十三石を領す
天明四年正月朔を以て生れ、文久三年十月朔を以て歿す、年八十、墓は
津島小沼常樂院にあり
吉野日記の著あり、板に上れり、家集をとせのやまぶみと云ふ、いまだ
板に上らず
三男一女あり、同國熱田神社の大宮司千秋氏の二男泰長を養子とな
し、女に娶はせて早く家を讓りぬ、妻陳子も歌をよくす、景樹の門に入
りしは文政の初年なり、毎月歌の會を催し、社中四百餘名に及ぶ、桂園
社中の大會をも屢催しぬ、在職中社殿を修營し、又よく配下の社家及
び領内の人民を撫す、曾て秦鼎と謀りて桶峽弔古碑を建つ、さるは松
井氏の祖先は今川家の士大將にて、彼戰に討死をつればなり、屢大和
播磨などの勝地を遊ぶ、又吉野嵐山の櫻、高雄の楓などを庭園に移し

植ゑ、老後には一室をそが一隅に造り、三老居と名けてこれに住す、歿
後に社中碑を名古屋門前町大光院の境内に建てゝ、長翁の「浮世なり
けりみよしの、山」の歌を刻す

出處目錄

桂園派の著書歌文

大人の甥松井小三郎氏覺書（三輪青谷氏より送られつる）

大人の孫神谷隆道氏覺書（三輪氏より送られつる）

兒山紀成（のりなげ）

景樹の弟子なり、通稱は勇、後勝之進と改む、愛松軒と號す、幕臣なり
伊勢國鈴鹿郡庄野の人早川直記の三男なり寛政十一年八月兄新八

郎と共に長崎奉行松平石見守に從ひて長崎に赴き、翌年國に歸る、文化三年江戸に上り、本郷御弓町に住す、四年九月西丸御書院番夏目長左衛門に抱へられ、五年正月夏目氏に從ひて蝦夷東地えとろふ島の陣に赴き、九月江戸に歸る、次で旗本津田錦之助に仕へ、其築地邸の内に住す、十一年五月津田氏を退き、御徒士兒山平三可至の養子となり、其目白の邸に移る、後火之番御譜第席に進む、天保十年病によりて職を辭す

天保十一年四月二十七日歿す、齡詳らかならず、淺草新寺町妙福寺に葬られ、後に駒込蓬萊町榮松院に改め葬らる、(但榮松院には兒山氏累代の墓と云へるがあるのみ)、法名を桂心院還譽眞解居士と云ふ

著書は蝦夷日記あり、(近きころ世に出でし桂園遺芳の内に收めたり)、歌集三卷あり、松の落葉と云ふ、いまだ板に上らず

歌は初伴蒿蹊、有賀長收の二人に學びぬ

前後二妻あり、前妻は父方の叔父松村采女の養女なり、名をときと云ふ、文政十二年十一月歿す、采女は京師佛光寺の臣なり、紀成も若きは佛光寺に仕へたりしことありと云ふ、後妻は後勘定吟味役立田岩太郎の妹なり、文政十三年八月歿す、紀成の弟早川再輔紀孝、養子錦之助紀言(のりのぶ)もまた歌をよくす、紀言は嘉永四年正月二十九日歿す

出處目錄

故早川紀孝覺書(宇佐美祐次氏より送られつる)

早川家記(宇佐美氏より送られつる)

宇佐美祐次氏聞書(宇佐美氏より送られつる)

榮松院過去帳(松岡國男の獲つる)
榮松院文書(國男の獲つる)
桂園派の著書歌文

内山眞弓(まゆみ)

景樹の弟子なり、又の名は眉生、聚芳園と號す
天明六年信濃國北安曇郡十日市場村に生れ、嘉永五年同國東筑摩郡和田荒井村に歿す、年六十七
著書は歌學提要(師の歌論をかき集めたり、又の名をあらすきと云ふ)東塢鶴聲、家相辨惑、隨筆等あり、又師の弟子たちに論されし文を集めて、梅月堂門人詠草奥書(又の名は師說)と云ふ、板よ上れるは歌學提要のみなり

業成りて國に歸り、塾を池田よ開きしに、志を獲ず、江戸に出でゝ又志を獲ず、天保八年再國に歸りて、塾を和田荒井村に開きしに、こたびは弟子も集まりしかば、復國を出でず、嘉永三年の秋より病にかゝりしが、歿するまで書と筆とを棄てず、信濃に桂園派のひろまりしは、此人と萩原貞起田が功なり

出處目錄
桂園派の著書歌文
松本親睦會雜誌

山田清安(きよやす)

景樹の弟子なり、通稱は市郎左衛門、秋園、又作樂園と號す、薩摩藩士な

り

鹿兒嶋上清水馬場に生る、若うして京師にのぼり、後に藩邸の留守居役となる、嘉永元年十一月藩に召還されしが、をりしも藩士相分れて爭ひし事のありけるに近藤某、高崎某等五人と相謀りて、やゝとなき人を刺さんと企てしが、事顯はれて、六人齊く自殺を命せられぬ

嘉永二年十二月三日歿す、年六十、墓は鹿兒島福昌寺にあり

著書は御即位式考、桵椰考、高千穗考、設樂考等あり

皇國の典故に精く、國學は本居平田伴三氏の說を奉せりき、平生勤王の志深く、口に筆にこれをものして、以て子弟を嚮ふところを知らしめぬ、小門の汐干によみ人知らずと記せる歌は、清安と村山松根との歌なり

出處目錄

薩摩人山口利雄氏物語、加藤雄吉氏聞書(加藤氏より送られつる)

薩摩人西村時彥氏聞書(少年園より見えたる)

故村山松根日記

桂園派の著書歌文

附錄山田歌子(うたこ)

清安の後妻なり

山城の國淀の人吉田某の女にして、初近衛家に仕へたりしが、清安に嫁して、ともに國に下りぬ、清安自殺を命せられし後、淀に歸らんとせけれども、許されず、藩內にて再良祿を求むべき由諭されて、種子島家に預けられぬ、此時歌子年四十一なりき、種子島家の太夫人松齋院深

く歌子を憐まれて、家臣柳田休助をしてその養子とならしめ、又休助の姉まつをして歌子を介抱せしめられき、歌子種子島に居ること十一年にして、万延元年八月十七日に歿りぬ、年五十一、島内西之表村雲の城と云へる松原に葬られぬ、種子島にありける程、横目の役にて彼島に下りしゑれもの、歌子を挑みしに、三日ばかりは怒りて物も得食いざりしとぞ、歌子が父も心ある人にや、歌子の清安に倶して國に下りける時、贈りける俳句に

あつき日や身よりこゝろのかきどころ

歌子常に此句を服膺ゑたりしとぞ、小門の汐干に氏を削りて歌子ののみ記せるは、此歌子の事なり

出處目錄

薩摩人加藤雄吉氏聞書

歌子の友平山ゆふ子刀自物語、西村時彦氏聞書（なにはがたに見えたる）

بسم الله الرحمن الرحيم

袖くらべ

はしがき

袖くらべは文政元年の春菅沼斐雄が其師香川景樹に從ひて江戸に下りし道の記なり、世に行はれたる中空日記は、其年の冬景樹のみ尾張まで歸上りし道の記なれば、これと袖くらべとよみくらぶるに、おもしろき節いと多し、袖くらべとは京師に近き里の名なり

袖くらべに二本あり、一は歌數多けれども(松波本)、なほ思定むる所あれば、今は歌數少き方(大學圖書館本、修史局本)を取りつ

菅沼斐雄(あやを)は備中國吉濱の人なり、通稱を頼母といふ、江戸に下り、隅田川なる夕陸館にありて、師に代りて、歌學を敎へたりき、師に先だちてみまかりぬ、

袖くらべ

菅沼斐雄

二月二十日、さりし十四日大人の東へ下りたまひし御跡を追ひ參らせて、けふ午の時ばかり京をたつ、天氣よし、送來し人々多し、歌も多かれど忘れつ、おのれ

やがて見む東の空のはなもあれどあは慰さまぬけふのわかれぢ

やましなの竹のした道まださむし岩田のすみれいつかさくらむ

せきあまり涙よしぼるそでくらべ別るゝけふの名にこそ有けれ

あづさゆみ春ともいはずさゆる哉あふさかやまの杉のしたかぜ

大津より舟にて矢橋よ渡り、夕暮がた草津の里なる山内が家にやどる

二十一日、つとめて立出づ、梅木の里よて

梅の木の春のさかりはいまならしさへづりかはすうぐひすの聲

坂下にやどる

二十二日、夜ごめよ立出づ

すゞか山杉のこずゑにかたぶきてけさおもしろき月のかげかな

うぐひすの聲もひゞきて鈴鹿やまたにの岩瀬のみづむせぶあり

打いでん言の葉さへもおかりけり筆すてやまのはるのあけぼの

打渡る川の名を問へば泉川なりといふに

都いでゝ三日の原をもすぎあくにはやわが影はやつれけるかな

桑名よりやどる

二十三日、七里の舟渡なり、午の時ばかり尾張國熱田の里に舟はてゝ

ひるげたぶ、鳴海をすぎて桶狭間の古戰場といふ、こは大路より一町

ばかり南にて、見おろす山ぶとろなりとぞ、今川治部大輔討死の處

にて、大將はじめあまたの塚ありとか、おのれ足痛みて駕籠にてくれ

ば、得ゆきても見ず、夕暮池鯉鮒につく、こゝにて大人に逢奉る、うれし

さ限なし、もて來たる餞の歌まねらす

幸文

しきしまの道の草木もことやめてなびき待らむ旅にやはあらぬ

正澄

むさしのゝはてのはてまで敷島の道ひらくべきときはきにけり

玄如

おくれたるかりの便にことづてむ花みてはやくかへりませきみ

此度の御供は河野重就、菅名節におのれ加はれり、さて出立ちたまひ

し日よりの御歌はいかにと問ふに、重就取出でゝ見せられける日な

みのまゝを再左にしるす

二月十四日、辰の時ばかり大人に從參らせて岡崎を出づ、送りの人
人朝山治部少輔常清、山本駿河守昌敗、丹羽出雲守正高、三宅右近將
曹意誠、村田左近將曹武備、竹内有岑、有年篤廣、鈴鹿保利、松岡歸厚、横
田昌孝、小泉重見、上原清樹、波多野親民、伏春樹、大田樹德、菊岡言興、栗
林貴林、河北成之、光福寺宗遠、常樂寺惠岳なり、さて餞の歌ども

思立つ旅にしあればとゞめあへずはやく歸れといのるばかりぞ
三條右大將の君

かはかたもうとく過ぬる中なれどへだつときけば更にかなしき
花園侍從の君

我にのみかぎれりとしも思ふかあたれもわかれは惜むべけれど
安子御方

はるがすみ立にし跡にきくならばわかるゝ日だにしらで過まし

あづまぢにありといふなる隅田川すみつかぬまにはや歸らなむ
そへてやる心のかげにみえばとそいなとはてねの閑もとゞめゝ
則子御方

いくたびかうちれどろきし空言のけふはまことになるぞ佗しき
駿河守昌敗

隅田川さくらさきなばまづつげよ君がたまづさはなとのみ見む
うぐひすも今はな啼そとゞむれどしひても君はゆかむとぞする
出雲守正高

身にしまばきみとまるやと山風もこゝろありてぞ冴かへるらむ
大和介永知

はるゞと心に君をれくりれきてあとにながむるあふ阪のやま
越中介直慶

あしがらの關の八重山はる〳〵ときみをへだてむ森がすみかな　阿波守信敦

かへるべきわれは都にとゞまりて君を送らむとおもひかけきや　有岑

夢にだに見ぬあづまぢの果なれど君よりさきにゆくとゝろかな　篤廣

わかるれどやがても君にあふ阪のやま松かげにいでゝむかへむ　重見

くむ酒のめぐりもあへず歸りてむ君にはあれどけふのわかれぢ　韶

たび衣たつ日のゆくゝはやけれどまたむと思へばとはき秋かな　齡子

なつかしと我思ふ方にきみゆかばいとゝながめむあづまぢの空　近子

きみかへる秋のゆふべの風ふかばいかに身に染て嬉しからまし　敏子

かくばかりつらき別とれもふまでなれにし君ぞかつはうれしき　周子

をり〳〵ゝ風のつてにも便りせよあひみむまでの玉の緒にせむ

わをやぎの糸のうちはへ長き日をきみにわかれていかに暮さむ

なは男のも女のも、貴き賤き、かず〳〵侍りしかど、立のさわぎに書とめざりしゝにもれつ、さて常清、昌敗、保利のぬしたちは窯の森まで、親民、春樹、樹德は袖くらべまで、言興、貴林は諸羽山の麓まで武備、有岑、重見は打出の濱まで送り來れり、さて山科なる磯田淨伯

やつこ茶屋に待受けて餞せられしに別るゝ時、大八

みやこいでゝまだやつれねど鏡山きみが影とぞたちよられける

あまりよもわゆみかそくゝ牛尾の山のこなたに日をやくらさむ

逢坂にて重就

いかなれば名のみなりける逢坂の關にこゝろのとゞめらるらむ

大津の石場なる遠帆樓よ登りて、おの〳〵酒のみさかなくひわへり、

夕つかたより雨降出ければ、八々湖邊春雨の心をよまむとてよめる

正高

雨ながら月もおぼろにうつりけりなぎわたりたる志賀のうな原

意誠

うちいでの濱風たえてはるさめのふるあとみゆる波のうへかな

篤廣

うちむかふ鏡のやまもくもりけり月だにみねぬはるさめのそら

歸厚

春雨にぬれてやばせをわたりゆくたびゝといかに佗しかるらむ

うきくもの絶間にみゆるしら涙を雨にひもとくはあとてそみめ

重就

うちかすみ雨にぬりぬる今宵しもあさつま舟はいづちこぐらむ

清樹

十五日、やどりとし人にとゝにて別る、さる中に

こゝまでは送りきたれど今はとてわかるゝそでにかゝる雨かな

正高

みなびとのわかれをかしむ心より空もくもりてはるさめやふる

篤廣

あづまへときみがうちでの濱松のまつにや今はこゝろかけてむ

又意誠が一ひら書きて出せるを見れば

大人の東へ立出たまふを見送り奉らむと、住みたまふ岡崎を出づとて

君がけふみすてゝいづるをか崎の梅のたぐひとなりにけるかな

かならずと契りしものを旅ごろも何よよりてかたちれくれけむ

あづまぢの山べ海べのはるがすみわけゆく數にもれよけるかな

あづまぢの花にときみがゆく旅の門出のそらぞかすみはてたる

別れゆく君がこよひの初たびねねざめむものをはるさめぞふる

歸厚も同じく出したる歌

あふさかの山邊を君とこえゆけば我さへたびのこゝちこそすれ

君にけさわかるゝ道のはるさめは常よりことにうちしめりたる

此ふたりはおほ草津までおひ來れり、波の上にえりといふものをかけすてたるを、大人

ころもでの田上（タナカミ）がはのみあかみにかけたるゐりは綻ろびにけり

いとゞしく雨のなごりに打かすみおぼろにみゆる月の輪のさと

草津の里山內春索がもとにやどる、よくあるじしたり、父頼喜の五十の賀の歌を乞ふ、こはをとつとし願ひたりしを今まで忘りたまへりしなり、大人

この門に流れながれてしづ川のしづかにへなむ千世をこそ思へ

妻なる紀伊子も今年同じ賀なれば、大人

あさみどり春の草津のさとなれて幾世までとかわかがへるらむ

十六日、あしたあるじ方よりよみて出せる歌

うきものと名にこそたてれ花故の草のまくらはのどけからまし　春索

わづまなる櫻みむとてきみゆかばみやこの花ぞうらむべらなる　知義

すみ田川すだのわたりの花よりもきみがことばの色やまさらむ　紀伊子

春索、知義は石部まで送り、意誠、歸厚こゝにて別れたり

たびびとのしげき草津の里なればたちまぎれてもたち別れなむ　意誠

すがるべき君がたもとの陰をけふよそにみむとは思はざりしを

雨はれしあしたの雲のわかれても別れぬものはこゝろなりけり　歸厚

春雨もはれてのどかになりぬるやいでたつ君がひかりなるらむ

たらちねの親に別るゝとゝちしてこの宿さへにたちやかねつる

かへらむといひし言葉の露よりいまより秋をまちわたるかな

大人御返し

れしなべてへだてぬものは白雲のわかるゝ時のこゝろなりけり

かくよみたまへるは、下に隔てたまへりしことありしにや知らず、

重就

春雨のはれし空にもかわかぬはけふのわかれのたもとなりけり

三上山を望みたまひて、大人

都いでゝけふみかみ山れもしろしまことの富士をおもひてそやれ

道の傍なる松を見て、此松は千歳經なむなどいひあへりければ重

就

千萬の末にたかゝらむきみが名をこの松ならでしるひとはあし

晝過るより又かきくもり冴わたれり、梅木の里にて、大人

風さえて雪はちれどもはるありとにほひにあのる梅の木のさと

ある寺に糸引の名號の拜ませあり、その邊柳あびきたり、大人

糸ひきはこの青柳にかゝりけりはとけのみあはさもあらばあれ

水口よやどる、千鳥を聞きて重就

妹とねてきくよはだにも悲しきをみなぐち川にちどりしばなく

十七日、小里といふわたりを過るほど重就

けふもまた小里のさとにみそれふりはすとかたき旅の袖かな

闕の荒木よやどる

十八日、よべ雪ふりて道白し、けふはいと早く庄野なる長谷部氏よ

やどる、今宵南ありと思ふ方より月の出ければ大人

梅のはなさきたる枝はみえねどもみあみよりこそ月はにほへれ

十九日、雨はれこゝとさらのどかなりければ重就

都いでゝ日ごとにぬれし旅ごろもかわくばかりよ朝づく日さす

あるじ、朝日いでゝ鯉のをどりたる書に贄とふ、大人

涙たてゝけさもさわげり朝づく日登るやれのがこゝろなるらむ

早川紀孝も若松の陰に鶴五羽たてるかたにとふ

千世の上に幾重の千世か重ぬらむ小松よすれるつるのけごろも

又大人あるじに出したまへる歌

長谷部ぬしよ十年の後逢ひけるに、一夜さへやどりければ

もろともに頭のゆきいつもれどもとけてあひぬる春のうれしさ

あるじ父子、紀孝あど道の行手なる高宮といふ處にいざあふ、こゝ

は日本武尊の白鳥と化したまひし御跡にて、すなはち社の額に白

鳥山陵御蓋殿とあり、大八

あめのしたおほへる神のみかさ殿さしてわふがぬ八やなからむ

たかみやの松原ごしにみわたせばすきびたひなるかうぶりの山

陵のほとりより御瀧といふ山見ゆ、此山は牧にして駒多く出めり、

重就

たんだきのやまとしきけば昔わがかひし駒さへなつかしきかな

送りの人々酒などもて來て酌みかはす程、時移りぬ、大八

たか宮の竹葉をりしきまとゐしてたつかたしらぬしらとりの山

いにしへの神のみたまのしら鳥のたちけむ跡をしたひてゆく

日ながの里にて重就

いそげども日永の里といふめればいざたちよりて梅のはなみむ

四日市にやどる

二十日、朝明川より重就

うちわたすさけの川の淺き瀬よかゝれる涙のかもしろきかな

桑名に休らふほど雁をきゝて、重就

ふる里の方をさしてもゆくたびの空にきこえてかへるかりがね

さや川のさやかに昇るかげろふはみづよもよほふ花かとぞみる

佐夜川の堤を徒にてめぐりて、津島なる氷室氏にやどる、いとねんごろにあるじせられて旅のうさ忘るゝに似たり

二十一日、同じ家よりいまる、菊の蕾贊、大八

浦風はのどかになりてしらぎくのにほひばかりをふきあげの濱

底わたり見めぐりたまひて、大八

梅はちりさくらはさかぬなか垣に春をしめたるあをやぎのいと

二十二日、出立つとてあるじの前へ書きておきたまへる一ひら

氷室君を訪ひ參らせて、二夜さへやどりけるに、ことなる御あしらひの辱さは申すも更なり、さて別れ參らするに、あかぬなごりを今日より後にさへ思遣うはべりて

君が里とひしゆかりにふぢ涙のふるき名をさへかけてたのばむ

又、思ふ人雁となきゆくものならば秋の契はたがへざらまし、

など承り侍りて

逢ふらむ秋はしらねど立もあへずやがてゆくらむ雁のたまづさ

さてゆき〳〵て阿波手の森を見る、たび重就が故郷をすぎなんずるもの、故ありてたちよらぬ心の内を思ひやりて、大人

ことさらに君が袖にやかゝるらむおやにあはでの森のしたつゆ

此御歌をきゝはべりて重就

さらぬだに包みかねたる袖の上にきみさへかくるもりのした露

甚目寺(ヂモク)よて鶴の巣くひたるを見やりて重就

ときはなる松のこずえのひな鶴はいくらの千代の籠るなるらむ

夫より琵琶島にかゝる、大人

風ふけばやなぎの糸をびはじまにかけてしらぶる涙のおとかな

宮のやどりより成岩(ナラハ)村なる澤田氏へやりたまへる一ひら

志言ぬしの住めるあらいの里、こゝより程近しときくよ、おはやけのいそぎに得訪らいでよみれき侍りける

とゝろざし君にあつ田の宮すぎてあはずあるみのうらめしき哉

二十三日、熱田の社に詣でゝ、大人

しきしまのやまとたけをの大御神しづまりゐます宮のたふとさ

かさ寺の梅さかりにて鶯なけり、大人

笠寺をけふ來てみればうぐひすの花もてぬへる名に社ありけれ

鳴海にいたる、風いとはげし、大人

みわたせばはるの盛にあるみがた浦風しばしふかずもあらなむ

桶狭間の古戦場に入りて、大人

あと〳〵へば昔のときのこゑたて〳〵松にこたふるかぜのかなしさ

もの〳〵ふのたてこもりたる桶狭間なみたのたまるところ也けり

千人塚を見やりたまひて、大人

かの岡にかれたる松のひともとや朽しかばねのしるしなるらむ

ゆく〳〵すゞなさきみてり、大人

つはもの〳〵おち合の里あれたれどのこりけるあの花ざかりあり

池鯉鮒の山吹屋にやどる、あそびどものそこら立ちまふを、大人

時すぎて梅はちりふのさとあれどときはにはふ花もとそあれ

これまで重就がしるしたる日記のまゝを書きつく

二十四日、雨ふる、京より具したる奴をこゝよりかへす、おのれ

さきいでむ花のためさへ思はれずわびしかりけるけふの雨かな

矢矧のさとの橋もとなる伊勢屋よりひるげたべ酒くむ、岡崎人かれ

これ來てまみゆ、おのれ

もの〳〵ふの矢矧の橋にくらぶれば瀬田の長はしみじかゝりけり

岡崎の驛にやどる、さて重就父の墓に詣で〳〵

たらちねにあはぬばかりかなき父をとふにも袖のぬるゝけふ哉

又師とたのみし石堂何がしの墓にて

語らむと思ひしことのかずかず〳〵はつきぬなみだと成にけるかな

二十五日、げふもふる、岡崎人都筑大成藤河まで（オホナリ）おひきたりて、始めて

あひ奉りて、やがて門に入らむことを願ふ、うけひきたまひて大人

君とわれゆかりの色のはなかづらけふかけそめつふぢかはの里

さて道の上などねんごろに語りたまひて、別れたまふとて、大人

くもかゝるふた村山のふたゝびはみにじやみえむ定めなの世や

さすがもとの故郷の忘れがたさに重就

都いでゝはる〳〵來ぬる旅なれどけふたちそむる心地こそすれ

赤坂よやどる、この里の歌よみといふ加藤信正をよぶ、上妻良古、淺井守吉など伴ひて出できたり、夜更るまで酒くむ

二十六日、よべの歌人のあるひにて、前芝のさとなる加藤廣正をとぶらふ、こは去年の夏都にてちぎりおきたまひしなり、さて語らふほど人々の前へ出したる、かのれ

しきしまの道には旅やなかるらむ逢ふ人ごとにしたしかりけり

又駿河人服部菅雄來りあはせて大人にまみえ參らす、昔の事ども語らひて書きて出せる歌

はな鳥にあくがれいでゝ草まくらおもひかけきや君をみむとは

年をへてあひみしかどもをか崎のさきかりけりときくが嬉しさ

大人御かへし

人やりの道なかにして十年あまりおもひし君をみしがあやしさ

此ぬしが身の上の移りかはりしことゞも聞きたまひて

さま〳〵につなぎし君が玉の緒のながき末にもあひにけるかな

同じぬしが冬枯の日記と名けたる一卷に、なほにてもいさゝか序めきたる詞加へたまへ、と乞ひければ、取あへず書きてやりたまへる

十年あまりの昔、都にて相親みし服部菅雄主に、けふしも計らず回りあひし處はすなはち、三河なる前芝の里加藤廣正の家也けり、かたみに旅の行きぶりにて、積るてと〳〵かきつくしける中に、冬枯の日記といふ一卷をとうで給へるを、取りもあ

へず開きみるに、とはかの昔の都あそびを記されたる也けり、
みそかに物せられし内わたりのくまぐまをむねと書き取られて、まのあたり浮み出づる節々少からぬにも、再若がへりたる心地さへせられて、思ひあへずうたへる歌

めづらしき君よあふだに嬉しきをむかしさへにも見ゆるけふ哉

加藤信正が大人に出せる歌

音にのみきゝつる花のみやとびとその言の葉をひとに得てしが

大人御かへし

君よとそとはむとおもひし東路の花をわれよはなよもとむらむ

上妻良古よりも

さきやらぬ宮路の山の藤かづらはひまつはるゝかひもあらなむ

と聞にければ、大人。

君にさへかよふとゝろかみやぢ山ふりし跡だよこひしきものを

あるじ廣正よりも

まれ人よ春のながめの時間あらば浦のみるめもわへましものを

大人

うちはれしきみが心のうらにこそ雨もさはらぬつきはみえけれ

其子正柔

しはたるゝあまが苫屋に思ひきやみやこの花のにほひこむとは

大人

おみならぬ旅の袖さへかわきけり何しはたるゝところあるべき

あるじ小侍従の歌よ賀とひければ、大人

世のおかにありわづらひし昔にもまさりてつらき鳥のこゑかな

二十七日、けふまたくもれり、人々は徒よて、たのれは舟にて吉田まで

ゆく

二十八日、けふもこゝにあり、こはかほ井川このほどの雨にて渡たえたりと聞きてなり、家の女のもゝの一枝を手折りきてこれ見たまへといふよ、大人

あつかしきみやこの春の事とはむものいひかはせ姫もゝのはな

いづこかゝ旅ならざらむ世の中はよしや吉田のさともまたよし

二十九日、とくたつ、大人

朝あさあ起うくもあるか旅ながらさすがに草のまくらならねば

本坂ごえといふ山路よりゆかむとす、こは大路をゆくよりは五里ばかりもとほけれど、大人の舟をきらひたまへば荒井の渡をよけむが爲なり、れのれ

山をさへをどりこゆべく思ふかあ足結(アユヒ)しめたるけさのこゝろは

里はづれよて、大人

おもかげに花のさかりもみゆる哉ゆくすゑかすむ春のあけぼの

長澤といふところにて重就

春の日のあがきまつ原わけくれればさへづりかはす百千どりかあ

もりをかといふわたりにて、大人

あさたちてさめぬねぶりを山畑におどろかしける雉のひとこゑ

しもふかき小松が原のみちしばにおちたるつばき色のこきかあ

かのれ

霜どけのすゝなの露におどろきてあがるひばりの聲ぞきこゆる

重就

小山田ゝみてるなづなの花ざかりきえのこりたる雪かとぞみし

都にてゆきかきわけてつみし菜の花のさかりになりよけるかな

こゝろざすあづさの花や開くらむ山邊のすゝなちりそめにけり

嵩山の坂道にて、大人

まへ芝の沖ゆくふねのほのかにもかすみたなびく浜の上のさと

浜の上は地名なり、見あぐる杉生に一むらの煙たつは、杉の實のけぶるなりといふ、此わたり高きいはは峙ち重なり、猿ども多く、梢をとびめぐり、あるは葛に取さがりなどたはるめり、重就

ふる里をあとにみかはのすせの坂われのみひとり登りかねつゝ

遥にかへりみれば、谷深うしてものすごく、巫峽のみこゑ思出でらる、大人

ましらなく杉のむらだち下にみて幾重のぼりぬすせのねはざかやう〳〵登りはつれば三河と遠江との境なり、こなたかなた見わたす景色いはむ方なし、大人

遠つあふみいづれの峯かたかし山はまあもしらぬたびの空かな

奥山といふ山のかあたに雲のごと仰がれたるは富士のねありといふに、大人

おく山のかすみがくれにしら雲のあびくや富士の高峯あるらむ

おのれ

ふじのねときけばこそあれ天の原たゝしら雲のさらぬありけり

日々澤村普明寺にこのはど觀世音の御戸ひらきありとて、いとにぎはし、門内に大きあるしだり櫻さきあびきたり、大人

さをひめのおれる錦のいとざくら一むらたかくかけてけるかな

道の傍に楠の大木あり、めぐり十八尋ありと云、大人

うづきあき嶽とならむきみが代のかげをみせたる楠のひともと

日々澤の日々にみやこは遠ざかり彌生みかひもちかづきにけり

三日の里にてひるげたぶ、此家にうゐゐありて、あやしき雛どもならべたり、大人

名におひていつも三日の里なれば彌生もまたでひなまつりせり

引佐山にのぼるほど、俄にかきくもり雨かぜ面を打つ、からうして峠にいたれば、引佐細江目の下にみわたさる、勝景いふばかりなし、かの

れ

來し方もいま行末もとはつゐふみいなさ細江にわれはきにけり

遠つあふみ引佐細江をけふみればおもひしまゝの景色なりけり

右の方は今ぎれの沖あり涙いと高し、大人

いかばかりあらゐの涙をいなさ山ゆふかせたちて雨はふりきぬ

重就

都よりとはつあふみのいなさ山君とこにむとおもひかけきや

涙ごしに三方が原の古戰場をはる〳〵見わたして、大人

ひとたびのむかしはしらず天が下きみがみかたの原となりにき

又小引佐の坂路にかゝる、鹿垣のひまよりかへりみたまひて、大人

いつまでか面影たゝむ遠つあふみいなさ細江をかいまみてけり

浦涙の打かどろかす夢山はみることかたき名にこそありけれ

ゆく〳〵花多し、大人

花あればまづ里の名のとはれつゝ人なつかしきはるのたびかな

いざさらば氣賀の關屋に宿からむはるのひかげもくれ石のさと

やがて氣賀の里にやどる

三十日、關の戸のあくるを待ちてとおもひしに、寢すごして日かげやゝたけたり、大人

都いでゝとはつあふみのけがの關けがれしすがた咎めざらゐむ

都のみこひしくなりぬ遠つあふみいあさはいはじ人もこそきけ

關を越てしばらくゆけば三方が原なり、大人

遠つあふみ三方の松のかげにして目にかけそめつふじの高あは

へだてしはたちばかりの年月に而がはりせぬふじのとはやま

かのれ

白雲にきのふかくれし富士のねはやまの上よりあらはれにけり

濱松まで四里八丁の廣野よて、松ばらづたひの長路にみなうみはて

ぬ、大人

濱松のとほきかげまできたれどもこゝろにかゝる糸ざくらかあ

こはさきに見たまひし刑部村なる宗安寺のはなをよみませるなり、

濱松よ至る、里びといはく、此處の君事ありて、陸奥の棚倉に移された

まひ、棚倉の君は肥前の唐津に、唐津の君はこの濱松に入かはりたま

ふなりといふ、さることゝ來らむ五月の頃に定れりとぞ、げふしも此城

のもとを過ぐるに、なよがしくれがしと札打ちたる家のかぎり、見る

ものごとよいとはかなう、やがて今はなれ出でむとするこゝちあは

れいかならむと思ひやられて、人々袖をしぼりわひぬ、大人

こゞまでは變らぬものゝとき〳〵つらむはまつ風の聲のかあしさ

ある門の内にて、ひゝな祭の料にとめの童のやなぎの枝などものす

るを見たまひて、大人

かのづからむすぶ柳もこのやどをわかるゝ心のすさびなりけり

こむ春はたてゝならべむ棚ぐらのひゝな祭りはいかにひなびむ

かのれも

やがて今かけはなれゆく花かづら桃のゑまひもひらけかぬべき

天龍川をこぎいでゝ、大人

おもひやれ天のあか川あかばきてたゆたふ旅のこゝろぼそさを

ときしもあれ川風わたるくれ竹の葉分にみゆる佐夜のなかやま

おほ空にふじの高峯そくづれけるそれとみえしや雲のひとむら

見附の里にやどる、大人

事あくて氣賀の關だにゆるせしをなにをみつけの里といふらむ

三月朔日、つとめていづ、名栗といふ里に、玄づのめをといろ〳〵の莚

かるを見て、大人

ふたりしておれどもひとの花席ぬる夜の夢はしらずやあるらむ

とよみたまへるを聞きておのれ

さをひめの織出でにける春の野の花むしろをばたれかしくらむ

こゝの茶店にて酒のむ、この酒はちかきほどなる中泉といふところ

にてつくり侍り、その味なみならずなど誇りつゝ、雞卵などあまた盛

出せり、大人

なかいづみくめどもつきぬ看には十づゝとをのとりの子もなに

打わたし向ふそがひに富士のねもさやかにみゆるさやのあか山

日坂をのぼりて佐夜の中山にかゝる、俄にみそれふりいでゝ花とと

もにちり亂る、そばかりの間よ山路もふりかくして、わびしきものゝ

又おもしろし、大人

あづまぢのはあの盛をみつゝ來てみそれにあひぬさやのなか山

おのれ

獨來もたびならませばいかならむさやのあか山みそれさへふる

行暮れてたれかはとゝによなき石ひるさへ旅はかなしきものを

菊河の里にておのれ

さとの名をきけばきく河ふる雨もしぐれめきたるけふの空かな

えばしだよみるべきものをきのふけふ富士の炉くもかゝる雲哉

金谷にくだる處にて富士の雲しばし晴れわたりければ、酔ごゝろのいとゞうかれて謠へらく、節

吾頭縱飜三峽澗、勿贊此山豈一言、胸中縱藏五岳奇、勿寫此山役毛錐、畫圖窮竟皮相耳、詩筆亦是費比擬、下視群山氣卓然、中峯絶雲上無天、但使我臂十萬丈、屠杯一笑拍汝肩

重就

あはれ〳〵ふじの高峰に立雲のとゝろありても今ぞはれたる

申の時ばかり大井川を渡りて、島田の驛にやどる

二日、天氣ととにうらゝかなり、大人

朝づく日さしいる松のこがくれにほひまちとる山ざくらかな

重就

今は世は花のさかりのはるなりとつげがはになくうぐひすの聲

しばらく來て鐙が淵と云あり、大人

春風のあふるかとこそきこえけれあぶみがふちの水のしらなみ

やがて藤枝の驛なり、おのれ

うちなびきまづ面影にみゆるかなやがてさくべき藤えだのさと

大人

藤えだのまつばらくれば松の葉のちるも花かとおもひけるかな

ゆく〳〵都のことのみいはる、大人

思ひやるあすのみやこの花かづらまづおもかげにかゝりけるかな

岡崎のさとを過ぐればうつの山にて、鞠子の里までは一里あまりいともはげしき山路なりけり、昔のつたの細みちは古道となりはてゝ右の方に下りゆく處なり、もとより今は通ふ人なしといふ、大人は其

あと分けむとて、俄に駕籠よりふり立ちて、やがてその駕籠かく男を
あなひとしたまふ、この男あたりの小屋に入り、やい鎌とり出でゝ腰
よさし、さきに立ちてかあたざまに分入る、節に奴勇藏したがへり、重
就とおのれは足いたみをれば駕籠にてこなたにわかる、おのれ

うつの山大路さへにもはげしきをいかゞあるらむ篤のはそみち
峠にて女逢へり、名におへる藤枝のなにがしの娘なりとて習はめそ
いろぐ、重就

藤枝よかゝるゆかりの花もありやいざ立寄りてみてこそゆかめ
さて鞠子の茶店にて大人を待つほどいと久し

うつの山谷のうぐひすしるべしておくれし君をこゝにいざなへ
からうして出來ませり、嬢こゝしみ草木はえしげりて、いぶせきもの
から古おぼゆるわたりなりとや、即よみたまひし大人の歌

わけつらむ昔のあとのこひしさにつたひいりぬるつたのはそ道
うべ人はかよはざりけり百たにゝひとたにたらぬうつの山ごえ
みやとへと書ても人よつ〳〵しその玉づさのふでかとぞみる
うゑおきて長くつたへむ篤かづらこのはそ道のかたみなりけり

安部川よて、大人

墨田川のこれる花はありやなしやとふべき鳥もなきわたりかな
こはみちすがらさかりなるに、江戸の花のこゝろもとおくてよみま
せるなり、こよひのやどりは府中の大よろづやにて、庭さきに富士の
頂のぞめり、それみつ〳〵髪ゆはせたまふに、髻の高かりければ、大人

あはれけふ我もとゆひの高きねに掛るも富士の雲にやあるらむ

三日、けふは桃の節句なり、のどけさきのふの如し、おのれ

路のべのしだりざくらの花かづら旅のそでよもかゝるけふかな

沖津の茶店にて酒のむ、けふは汐干ありとて、海布かり貝ひろふひと岩のはざま磯がくれに満ちあへり、而白きことと限なし、さるほど尊女ふたりうちつれて門すぐるを、あれ呼びてひかせて開んはいかにとのたまふに、こは興ある事にこそとて呼入れたれば、ずのこにはひあがり、背たらおひたる袋よりやをら取出づるは、琵琶ありやと見れは、いと古き三味のあやしきねじめあざやかにうちならし、こなたざまに居なはりて、おいらんの道中はとはりわげたるは、三保のまつ風もいかにかは吹合せんや、大人

いかなれば沖津のはまの夕潮のひくとはすれどめのあかるらん

洞村あるある家にて、沖津のりと云ふを買ふ、いとわかきよめのたをやぎたるが、愛嬌づきたるに、節のさるがうごといへるを聞きたまひて、大人

しきなみのはやく心をおきつのり人のわかめもからむとやする

薩陸山より親知らずといふ磯邊、目の下に見おろさる、おのれ

ふる里のとはき旅路におやしらず子しらずの名ぞ悲しかりける

富士の姿はこゝとそといふに、かはかた雲にとおて、たかねのみかつかつ見えわたるいとねたし、大人

沖津よりゆふてえくれば、やま松のとず名にかゝる富士のしら雪

重就の母、そのかみこゝを越えたまひしことを、つねに語りたまへるを思ひいでゝ、重就

たらちねのはゝの昔のおもかげのたちくる涙にぬるゝそでかな

由比の里にやどりけるに、この家あまり磯ぎはにて、涙の音かまびすしければ、山づらなる羽根の屋といふにやどをかふ、大人

うちつけに入相のかねひゞくありあみの音のみあにいとひけむ

なほ涙の音もへだてあへず、大人

とよひもやまろねの紐をゆひの濱うちとけがたき涙のおとかな。

今宵みやこは如何にあどのたまひて

ともしびのかげにてるらむ姫桃の花のまとゐをおもひてそあれ

四日、晝まで曇りて晴れたり、朝のほどしばし雨やどりするところに、鶯のおきければ、酌とるをとめのそゝやと傾きけるを、こは心ありなど興ずるほど、大人

いとゞしく心ぞとまるわざもてがあはれといひしうぐひすの聲

中の郷といふわたりにて、おのれ

はるかにも谷をへだてゝおく雉のこゑを山彦とおもひけるかな

うちわたす籠をみても富士のねの高きほどこそおもひやられ

吉原に來たれど、雲おほ晴れず、おのれ

ふじのねはおもひ絶えよと足高のやまさへ雲のたちかくすらむ

本市場の富士本といふ家に入りて、酒肴調じさせて、ひるげなどもす、大人

夢にだに見むとか春のくもり日に富士のねむたく成にけるかな

童どもの菫つむを見て、重就

岡崎のさとのわたりのつぼすみれ我かあし子もいまやつむらむ

富士はおほ曇りて、足高はやゝ晴れたり、大人

黒髪はふじのねおろし吹きおびけ立てるや駒のあしたかのやま

沼津の驛にやどる、これよりかま倉なる誠拙大德をとぶらひたまはむ心がまへして、おすはとくよりなど云ふほど、大とこけふしも俄に事ありて、此驛なる油屋何がしが家に出來ませりと云ふ、さらばとて參り給ふに、おのれらも從ひて相見し奉りぬ、かたらひたまふほど夜

ふけたり

五日、けふ又くもれり、三島の里にて、大人

雨ふらばいざきてこえむ箱根やまこゝにもありや三島すげがさ

山路にかゝりて、大人

たまくしげ箱根の山をのりてゆくかごはかけごの心地こそすれ

笹原といふ所に休らふほど、大人

箱根やまのぼりもあへず小雨ふりあらしふきしくさゝ原のさと

重就

八重雲を下にみおろしてはこねやまをざゝが原をわくるけふかな

此家のをとめども、ならべたる雛を取くづして箱にをさむるを、今ま

ゐりとおぼしき下女の、つと寄りゐて、あゝ美し、あゝめでた、わきても

此わこのなごりおしさよと云ひつゝ手まさぐりにするを見たまひ

て、大人

今はとてとりおくひおの箱ねやまふたゝび逢はん春をちぎりて

やゝ登りて、おのれ

あし柄の高嶺やいづこけふみればみおしら雲のやへやまにして

いにしへの關路は左に見ゆる山の尾おりとき〻て、大人

あしがらの昔のあとをふみかへてのぼるもおなじ雲の八重やま

雨はげしく風よこさまに打ちて、わびしさ堪へがたし、おのれ

ふく風の目にてそみにね困ねやま雲をふみてものぼるなりけり

峠に來て破風屋といふにやどる、此家のうらはやがて湖にて、富士も

たゞまむかひに見ゆとか、けふは曇りはてたれば、甲斐なし、重就があ

はれとゝに住まはしおど云へるを聞きたまひて、大人

函根山ふたつだにある身おりせば一人はこゝにすまゝしものを

六日、よべ夜ひとよ降りて、けさはなごりおく晴れたり、大人

おもひきや富士を枕のもとにみてはこねの雲にひと夜ねむとは

函根山ふたゝび見むとおもひきや高嶺のうみのはるのあけぼの

又心のうちにおもふことありて、大人

此やどのかきはにかゝる蘆のうみの水のしらなみいつかへりみむ

おのれ

ふじの峯にわかると思へば蘆の海のひと夜のやども立うかりけり

關をこえて弓手の方に朝虹たちわたり、景色面白し、節

曉晴函嶺雨、驛馬度崎嶇、谷闇雲埋樹、峯開虹飲湖、斜蹊蹈莖确、殘霧

破糢糊、凄慘深松裏、風腥怪鳥呼

空はたかきくらし、ゆく〳〵袖のうちしめるに、こはまた雨にやと云

へば、駕籠かくおのこ、霧と見ゆるはやがても雲にて、つねの景色おは

かたかゝりと云ふ、箱根のわたくし雨とはこをいふにこそ、世に見知

らぬけしきなりけり、大人

松のつゆ杉のしづくはさておきてくもに袖をもしぼりつるかな

おのれ

うちつけに雲をわけても下るかなはこねのやまの杉のしたみち

たまくしげはこねの山のしら雲はわしの海よりのぼるなりけり

行手のしげみに鶯なく、おのれ

たまくしげ箱根のやまのしらくもにつゝまれてなくうぐひすの聲

あやしき香のするを雲氣なりと云へば、大人

はこねやま花をみにつるしら雲はあちぬにはひにかりにける哉

おひのたひらといふ處を下る、まのあたりけうとく峙ちたる岩山を

ひら〳〵よこぎりゆく浮雲の、山風にきそひ亂れて、皆をうがつわび

しさ心ぼそさ、云はん方なし、大人

はこね山おひのたひらのおひ風に雲にのりてもゆくこゝろかな

此わたりひたすら岩をきりならして道とせり、大人

はこねやまおひの平のたひらかにひらけし御世の道ぞみえゆく、

きみが世はかたき巖もおかりけり草木とともにうちおびきつゝ

たまくしげ箱根の底に入りぬればふたとおりぬるふた子山かな

おのれ

吹きおろす杉のあらしもはこね山たかねの海のおとかとぞきく

はこねやま見かへるそらの白雲はけさ別れつるところおりけり

畑と云ところにて、大人

はこねやまつたふ岩根の高ければかけひの水もたぎつしらなみ

駒形の社岩根づたひ瀧おちたり、大人

こまがたの神さびにける岩根よりしできりかけておつるしら浪

湯本にきてひるげたぶ、おのれ

けふみれば瀧のおがれの末おるをなにに湯もとの里といふらむ

いづこかとおもひしたきの水上はあふぐ高峯のくものしらなみ

大人

のこりける雪もおしとや春ふかきはこねのそこをはらふやま風

此里はすべて男女のみめうるはしと聞きしに、この家の娘まだいと

けおきが、貌より立居までいとみやびたるを、いたうめでて酌とらせ

酒のむほど、大人

色しろき湯本をとめをひと目みてみやこ慣しくおりにけるかな

この里はづれにいとよき糸ざくらのあるりと聞きしが、今さかりな

りや、散りは始めずや、など問ひたまふに、散ることは知りはべらず、よ

くさきて侍り、といふをきゝたまひて、大人

山ざくらちるはしらずと答へけりさらばさかりをおも影にせむ

はこね路のゆもとの花のひと本はまづ言の葉にはひけるかな

さてやがて其花の陰にきて、大人

たまくしげ箱根のやまのいとざくら組緒かけたるこゝちこそすれ

下りはつれば風祭の里なり、大人

箱根路をおりたる里はかざまつり花のためあるたむけしてまし

重就

箱根やまうちこえくれば小田原のあをうなばらにしら浪ぞたつ

小田原にやどる、夜になりて、大人

てる月の影もみやこにかはりけり空はひとつとなにおもひけむ

七日、天氣よし、橋を渡るところにて名を問へば、押切川といふ、大人

みあ上のいかあるゞ岸かくづれけむれしきり川のみづのにごれる

梅澤の里なる松屋といふに入りてひるげものす、此家のさくらいと

よくさきたるがやゝちり方あり、大人

とよろぎの磯うつ波のたちかへりみよとや花のそでにちるらむ

とのわたりよりすべて昔はゆるぎの磯なるべく覺ゆ、さて大人のた

まはく、こゝろざす隅田川のさくらいたらぬまに散りあむも計られ

ず、もとよりさるかたのいそぎに、都の花にはさきだちて旅出しぬ、よ

うせずはことしは花をはあやとも見ずして中々にやみなむずるもの

ぞ、さらばこの一木を此春の花見として、まづは心をやりてむとのた

まへば、げにもさありとて、時移るまで酒のみ遊びけり、大人

花あれば花にやどり、てこよろぎのいそがぬ旅ぞたのしかりける

折しもあれあかば散たる花の上にかたわれ月のかげぞかゝれる

限あれば出て行くに、榎島のさきとか、海中にさしいでて見ゆ、大人

音にきくみこしが崎やあれならむ沖はるかにもなみたてるみゆ

春なれやゆくもかへるもたびハのそでは一つに花の香ぞする

しばらく來て里の名をとへば、しほみと答ふ、大人

花をのみおもふ旅なりあづまぢのしほみの里はよきてゆかまし

松原くるほど、おのれ

こよろぎの磯菜つむ子もみえぬ哉さきちる涙のはなのみにして

國府の里に茅もて席あむを見たまひて、大人

誰をかもこふの里なるかやむしろしく夜の床をおもひこそやれ

菜のはなに蝶のたはむるゝを見つゝくるほど、駕籠にのりたる人の

うまくねたるを見て、大人

これやこの蝶のみるらむ夢ならば籠の内にしてくるしと思はむ

おのれ

やま松の木のまの花のこゝちしてあをうばらに涙のたつみゆ

大磯にやどる、今宵も涙の音高く、いねがたし、おのれ

大いそも小磯もおなじゆるぎのなみの音こそかはらざりけれ

大人

こゆるぎのいそ山おろし沖つなみいひあはせても我をねさせぬ

八日、夜をこめておく、大人

夜もすがら枕ゆるぎのいそにねてむすばぬ夢のいかでみえけむ

明方より空かきくらし雨風はげしけれど、馬入川とまらぬさきにと

急ぎて立ちいづ、櫻川にわたせる橋を花みずばしと云、大人

ちらぬまにゆかむとおもふを櫻川こゝろにかゝる花みずのはし

馬入川を渡る、舟たゞよひて乘得がたし、大人

舟だにも渡しがたきをむかしたれ馬のりいれしかはとなるらむ

あづまぢの大いそ小磯うちすぎてまたそでぬらすけさのかは涙

やみこやせる人の菰の下にぬれとほりたるを、大人

松が根にふせる旅人あはれあはれ雨ばかりだにゆきなやむ日を

簑笠きて松露はるを見たまひて、大人

かくばかりぬれて佗しき雨の日にあにもとむらむ松のしたつゆ

重就

松が根もゆるぐばかりに吹おろすあらしになやむけふの道かな

大人

松原はつゆもしづくもおちそひて雨だにあらきあらしふくあり

枝あがらあらしにさわぐ花みればちる時よりもしづこゝろなき

かげとりと云里にて、おのれ

陰とりの里のかひなくからかさの柄もりに袖をぬらしつるかな

こよひのやどりは戸塚の中野やあり、庭の花さきみちていと面白し、

重就

ゆきやふる花やちりしと立いでゝみれどもわかぬゆふ月夜かな

九日、天氣よし例のあさとく出立つ、信濃坂のはとりにて、勅使日野中

納言の君、江戸よりかへり上りたまふに行あひ奉る、大人

大君のおほみつかひの御さきおふ聲やまでしにきこえけるかな

大君に聞えあげむいつはあれど晴たるけふの富士のすがたを

立しのびし所をかへりみて、大人

さく花のかげともしらで休らひつこゝろありとや人はみつらむ

金川のさとさくらやと云ふに入りて酒のむ、女どもの出でゝ踊り狂

ふさまうるさきものゝかつ興あり、こゝより見わたす海原のけしき

さまかはりて又面しろし、おのれ

浦賀より大江戸かけてこぐふねのほのかにみゆる安房のとは山

大人

うめざはの花の陰にてきのふみし月はあみまにいでにけるかな

重就

ゑひたるもゑはぬもおとゝ心よりけふのかすみはたな引にけり

鈴が森をすぎて、大人

夕日かげさしのこしたる一むらのにほひは桃のはやしなりけり

大森と云ふところまで、朝岡泰任（ヤスタフ）、木村敏樹（トシキ）、本多以時（コレトキ）、兒山紀成（イツシゲ）の人々出向ひたり、ともに品川なる湊屋にやどる

十日、天氣よし、山口備義あるひして御殿山の花見よのぼる、盛なるもまだしきもありて、いと多かり、大人

大ぞらの雲もひとひらかさなりて木間もわかぬ八重ざくらかな

名はしらずいづれ木立のわかけれはちご櫻とぞ云べかりける

おのれ

櫻ばなちらでまちけるうれしさはまづ風にこそいふべかりけれ

かぜふけばかざしもあへぬ菅笠のひるがへりてもちるさくら哉

こゝをくだりて、品川のほとりをゆく〳〵、品川といふ川ありやと問ふに、人々なしといふ、此浦の名をいかゞよぶと問ふに、さる方の名もきゝしらずと答ふ、大人

打つけにいざ品川のさらといはむおもては海のあなたなりけり

ある寺の庭にもゝさくらあまたさけり、無量光といふ額かゝれり、おのれ

はかりなき光にまじるはななればその數さへもしられざりけり

泉岳寺に入りて四十七士の墓にまうづ、吉良殿の首をあらひたる井ありとて垣の外にあるを、大人

世々に名を洗ひわげたる水あれば今もかゞみとすみわたりけり

碑前にぬかづくに涙とゞまらず、大人

袖にのみふりてそかゝれかゝる雲なしといひつる大ぞらのわめ

重就

いか計うれしかりけむと思ひやる袖にせきあへぬわがなみだ哉

高輪と云ふ所まで葬園亞元、堀内照房備中人富山秀資の人々出迎へり、ともにそこの茶店に入りて酒のみひるげなどもいしして、未の時ばかり目白臺なる紀成の許におちつきぬ

文化十五年やよひはつかの日　源斐雄しるす

袖くらべ附錄（稿本なるべき方にのみ見えたる歌ども）

二月二十一日、つとめて立出づとて、刀自に云へる

ふる里をわかれしときのこゝちして君が宿こそはなれがたけれ

二月十四日、花園侍從の君（餞の歌の中に）

東路のすゑのはてまでわするなよたえずも君をたゞふこゝろを

歸厚（大津にて人々湖邊春雨の心をよめる中に）

みるさへにわびしくもあるか春雨にぬれて矢橋をわたりゆく舟

十五日、大人（送り來し人々に別るゝ時）

さゞなみのたゞがの浦涙はどもなくかへらん日とそおもふ影にたて

二十二日、ふたつえりを云へるところと經て琵琶島にかゝる、大人

さはひめの霞のきぬのふたつえり花さへいまやたちかさぬらん

二十八日、桃の花を見て、おのれ

日をふりし雨のなごりの春風にもゝのはなさへほころびにけり

晦日、おのれも（濱松にて）

千世までとおもひてすみし濱松の里のわかれはいかにかなしき

おのれも（女の童の柳の枝をどものするを見て）

との春をかざりと祭るひなあそびやぎも桃もかなしかるらん

三月朔日、三日の里にて、大人

かぞふればけふは彌生の三日の里またでも花はうつろひにけり

二日、赤根てふわたりに桃の花あまたあり、おのれ

さかりなる赤根のさとの桃の花わがねぶりをもさましけるかな

三日、由井の里にきて、おのれ

由井のうら磯うつなみの音たかしねがたかるべきこの一夜かな

六日、おのれ（湯本にて）

はこね山こゝろをとむる關もりはゆもとの里のさくらなりけり

七日、おのれ（ゑはみの里にて）

あづまぢのゑはみの里はすきたれどなほさかりなる桃の花かな

大人（國府の里より大磯へ來る道にて）

ゑらなみのたちまぢらずは海原と松のみどりといかでわけまし

八日、おのれ（大磯の宿にて）

枕までなみのよせくるこゝちしてゆるぎの磯のたびねかなしも

大人（馬入川を渡りて）

うぐひすの花がさいかにからかさの柄だにをるべくふく嵐かな

おのれ（おなじほど）

小よろぎのいそうつ波の音なれて松のあらしもそれかとぞきく

九日、大人(金川の里にて)

雪にきく安房の遠やまとはからずみるまで旅のひかずへにけり

十日、大人(御殿山にて)

限あればこぞのくぬぎの枯葉さへ殘れるものをちるさくらかな

神樂坂にて、大人

我岡の名にかよひたるかぐら坂それさへよそにみてぞすぎゆく

咲花の江戸にはつきぬいざこよひめじろの宿にかしわひてねん

筆はてゝ

筆のさが

はしがき

筆のさがは、香川景樹が若きはどの歌十首を取りて、加藤千蔭（チカゲ）、村田春海、小川布淑、伴蒿蹊、村田春門（ハルカド）氏知らず、真足（マタリ）、八田知紀（トモノリ）の評せしものなり、元來筆のさがと云へる名は、千蔭春海二人が評を書きし時つけつるまて、これに布淑等の評さへ加はりぬる上に、名をかへつべきなれど、さる事ありきとも聞にぬを、我さかしらにものせんもうしろめたけれは、今い尚筆のさがと云ふ

此本の原本は、浪華なる西村時彦氏の秘藏にて、初ま知紀の序あり、次に春海の序あり、次ま千蔭春海の評あり、其行間に春門知紀の評を書入れたり、次に布淑の評あり、次ま同じ人の雅俗辨あり、次ま真足の東

さとしあり、終に蒿蹊の續雅俗辨あり、今見るに便よからんために、布淑の評と東さとしとは、其くだり〳〵の下に分ち付けぬ

知紀の評も序も、主の自筆あり、但訂正に及ばざりしと見にて、いとゑどろなり、又評の中ゑ、末の總論に辨ず、云々など云へることの辨は奥にあるを見るべし、末に云へるを見るべし、末に委く云へりなどあれど、さるもの末に見にず、こは書かんと思ひて、え書かざりしあるべし」誤字脱字あらんと覺ゆるいと多かるを、處々引直しはゑつれど、疑はしきはなほもとのまゝにさしおきつ、さるは校合すべき本なければなり

十首の歌の中には、すこし引直して本集に出だしゝも見ゆめれば、おほ、わろきばかりをえりて」と眞足が云へるやうにもあらざりけらし」

加藤千蔭、村田春海、伴蒿蹊の三人は、名高き人たちなれば、人がらをの

ぶるまでもなし、但いづれも景樹ゑは先輩なり、小川布淑は蕣流が事ゑて、小澤蘆庵の高弟なり、春とあるは村田春門が事なるべしと知紀云へり、春門は初一柳並樹と云ひて、本居宣長（ノリナガ）の弟子にて、春海には親族あり、知紀の序の中に見えたる龜藥師の僧義天は、やがて春門の弟子あり、眞足は眞淵の門人にやと知紀は云へれど、然らず、氏は知られど、初香川黄中に從ひ、後に景樹に從ひし人にて、歌の上手ありき、と松波資之翁語られぬ、げに景樹の日記の中にも此人の名見えたり、知紀が景樹の門に入りしは、文政十三年（即天保元年）十一月十六日なる由、入門名簿ゑ見ゆれば、此評をものせし時（文政十三年秋）ハ、いまだ景樹と相識らざりし程なるべし

筆のさが

はしがき

此ふみは都なる某の禪師とか云へるが、香川景樹がよみ歌を問取りて、いかゝ思ひけん、恨むる節どもやありけん、其歌どもを、江戸なる加藤千蔭が許よ遣して難ぜさせたるなり、さるは景樹は彼古學の弊あることを思ひて、夙く一つの門を立てたる人よしあれば、其趣の隔より、千蔭恨むる事やありけん、おのれ名を匿して、村田春海に謀りて、いみじう其歌を評しあばめたり、(此時景樹はいまだ壯年にも足らはぬ程よや、千蔭ははや翁とも云ふべき齡ありけんかし)固より其歌よからぬ節どもゝ交れゝば、其論當らざるにもあらねど、そが中に强ひておとしめ誹れる心はへもあり、又いたくもて僻めたる事どもゝあん

めれば、京なる布淑具足のふたり其難を打返し、伴蒿蹊はそれに奥書を加へなどして、限なき論とはなりにたり、我友池田兼見都にありしはど、龜藥師ある僧義天と云へるより此ふみを借りて、横田執喜に誂へて寫し取らせたるなりけり、已今つら〳〵見て、云はまほしき事どものあるを、試に又此奥に追加しけるまゝに、其由聊かくをん、時は文政十三年の秋

知紀

はしがき

これは我北隣の翁の常に言問ひかはす都人の許より、此歌は都にて今我のみひとり歌よむとて誇りがほ云ひ罵るかのこのよめるなり、まだしき心には如何ばかりの歌よみとも思分かねば、善惡定めて見せたまへとて、かこせたるありとぞ、さて翁は取上げて云ふべき歌にもあらぬをとて否まれつるを、あながちに度々乞求むれば、さて否むべき事にもあらずとて

小川布淑云、の一文字餘れり、いかゞ

わろかんなん節など聊かいつけて、已にも言加へて、かゝる歌をろうじ云ふも、初學の爲よは道しるべともなりぬべきをとあれば、取りて一わたり見るに、何のあとゝむべき節もなき歌なれば、云ふに足らぬ業なれど、戯に翁のしりにつきて、何くれとかいつけたるは、

布淑云、りと收めまほしき語勢ならずや

筆取れば云はまほしき事多く出來めるは、さがなの業や、と人の咎めんにもえ心もかかで、いとみだりがはしうてそ

橋本の地藏麿

具足云(東さとし)、むつきの朔二日と云ふに、或友だち入來たり、かた

みに悲なく年打越えしことを喜ぶついで、美濃紙十ひらばかりとぢたるものを懐より取出でゝ傍に置けり、そは何ぞと問へば、これは景樹が歌を東人の千蔭春海と云へるふたりのをぢたちが論ろひわばめられたるふみなり、いづ方へさしてかとせたるよや、そは知らず、都の歌よみたちとを見て、皆宜なりとてうなづかれぬる中よも、伴の蒿蹊といふ醫はそれに奥書をさへ書加へて、去年比叡のほとりなるやんごとなき御許へ奉り上げつと云へり、かゝれば世の中ゆすりみちて寫し傳へもてはやすめづらものなれば、そこにも見たまへとてもて來つるなりと云へり、こを聞きてかのれ云へらく、あはれ景樹は幸多かる人なり、人の歌の上までを誰かは云分く人のあらん、ありとも誰かは云ひまつはし知らせん、かく書にかきあらはしつれば、公なるものを、いかでか歌主のわたりにてもみ

えしらがはざるべき、見ば物學のすぢともなどかならざらん、あはれとよなき賜を獲つる人なりけり、しばし貸したまへ、我も一わたり見てよき悟開きてんと云へば、差置きていぬ、さて靜に開きてつぎ〳〵開き見るに、その論ろへる事どもいと〳〵鳥許なるすぢのみにて、學の道に入りしよりけふまで、かゝる歌ぶみは見たることもあらず、まだしきれのれが目にすらうたて思はるゝを、おぞやとこの歌よみ達の皆うべでとゝしてうけひきつらん、むげにいたはらず、書下せしは便なしなど云へるもありとか、あはれこれ佛の宿緣など云ふものにやあるらん、と思ひて寢ねつ、あまりに深く心いり思へるけにや、即その夜の夢に筆取りて思ふ節をば書きしるす、と見さして目覺めぬ、されば其言の當らぬがちなるを、夢心地なれば何かは云はんだゝ見えつるまゝを書きとゞむるになん○題號

筆のさが　ふみかいあらはすことは憤の思に出でしと唐人の云へるを、まめなる方にて見ればいさゝか違へり、されど物のれはやうさるものゝかし、今の冊子も春海が心に何ぞ憤り思へることのありけるより成れるあるべし、さるを心なき筆におはせたるは歌人のみやびたるかは知らねど、まづ此打見の實なきに、ふみの書きたらんやうをも思ひはかられて、かたはら痛きものあり○はし詞に云へらく、わながちに度〻乞求むれば、云々、都人のあながちに度々乞求めつることと眞僞知り難けれど、かゝる事を遠き東まで云遣るばかりの烏許人なれば、強ひて度々乞求めまじきにもあらず、さるにても此都人も歌の善き惡きをばみづから得思ひ辨へずば、さら〳〵ありぬべきを、ふりはへて東まで度々乞ひに遣りたる、如何なるしれ人とか云ふべからん、景樹が歌は我おはかた聞きかける

を、これは殊にわろきばかりをえりて遣りたるにて見れば、歌のよしあし實に知らぬ人にてぞありける、又きのふ人のほのめかしつるは、何とかや禪師ある人のやうまも聞えける、實にさる人ならば、いよゝ人わらへなる事なりかし、國詩の最上乘小乘禪をば法師の身として凡俗に問へる、いかにぞや、國詩の上すらしかなり、まして妙悟に於けるをや、山でしに烟の薫るを見ても、火なることをばとみに得悟るまじき人になんありける、又千蔭もいたき烏許人なり、爲してよからぬ事はいつまでも爲すまじき理なるを、強ひては否むべからずとて、我はがはに人の歌を云下せる、いかにぞや、まことの人の求のもだしがたくゝ、其程につけてあへしらひ置くべきものなるを、春海にさへ言加へさせつる、いかなるしれ心ぞも、諺に云へらく、まみ明きたる千人、まみ盲ひたるちひと、此めくらなる千人が

東人の導に欺かれてあらぬ方に行惑へらん悲さよ、たとひ景樹が歌のえせたらんにまれ、二人までしてあばめはやすは何ぞや、千蔭ひとりの力には叶はで、隣まで雇ひ來れる口網の諸持に搖ひかねて、いと〳〵見苦し、又云ふに足らはぬ歌を強ひて取上げて論ろひ、剩そのわざを戯となせる春海が心は、いかなる夷心(エミシ)なるらん、かゝる毛人の言を取上げ云はんはあまりにともし〳〵をちなき業なれど、我とわれ文字刀を取りて斬り開かずは、きはめて都には人なしとて、愈ます〳〵こなたさまに侵し來りて、果々はひとつまゆのわきなく、あをにのいつはりたまに逢ひましたらんが悲さに、強ひて刀筆のわざをなすものなり○橋本地藏菴と名のる由は、七年ばかりさきおのれ東の皷の師の許にしばしありける比、師の家の間近く賣するを云ふものありけるを、春海買取りて、いづくよりか移り

住める事ありける、其わたり近く、地藏橋と名づくる小き橋のある故に戯れてしかは云ふならん、その名のる由はいかにまれ、「人の咎めんも得心おかず」と云ひ、又我名を匿して人の名をあらはに擧げつるなどは、無下にあはつけきしわざなり、末のくだりに至りて、温柔敦厚ゝ詩の教なりなど云ひて、人にはことゞしく教へだちさかしらに云へどおのれ用ふることをば曾て知らず、いはゆる口と耳との學にて、これらの人をば昔より咿(ロ)りて論語(ゴ)よみのろで知らずとは云ふなり、固より歌よみと云ふばかりのものにしあれば、かくまめだちたるすぢは身に行ひえざるも理なり、さらばたゞに默(モダ)をるべきを、我前しりへの合ひがたきにも心づかずて、ず〳〵ろに人の上とのみまが〳〵しく云ひかとしむるは、あはれ腹ぎたなき人にぞありける

筆のさが

梅月堂景樹歌

くひな

きゝすてゝねられざりけり我門をさしてはたゝく水雞ならねど

北隣の翁云、きゝすていはと云はねば足らはぬことばなりさいては

のはの詞なくてあらばや

地藏磨云、さいてはのはは實にあくてありぬべし、このひと文字きはめて病なり

布淑云、此難よく云はれたり

具足云、これはさきにわが聞きかけるは、夜水雞と云ふ題なり、さ

て難者の初の句は。と云はざれば詞足らはずと云ひ、四の句は。の詞きはめて病なりなど云へる、殊にかたくなしく評しいだされたるものなり、すべて歌のとゝのひさま〳〵なるがうへに、詞をやるにもあるは省き、あるは延ばへ、あるはたすけ、或はつゞめなどの品々ありてなるあらずさだかならねど、諷詠するにその心おのづから知られて婉曲なること文の正道あるとはいたくことなり、さるは一首（ヒトクサ）の姿の古より定れる格あるによればなりけり、今さるてにをはにおなじからん古歌を挙げて難者に口わかすべきは、たはやすき業なれど、さばかりゆるびあからんもおいらかならねば、暫くおきぬ

春。云、きゝすてゝぬると云ふ格なり

知紀。云、さいていはのは。文字はいかにも無くてかなはぬことなり、

こはもとめても入れつべきものなり、唯はの。の一字にて歌の風味はあることなり、かゝる味をだに知らぬひとあればすべての論いと〳〵おぼつかなし

朝納涼

みなづきのうたゝね山の朝あらしさむしといはん宿やなからん

翁。云、夫木にうたゝね山といふ歌二首出でゝ、一首は「夏ごろもうたゝねやまの時鳥今はきときたちかへりなく」家持とあり、家持の歌に曾てなき歌にて、殊にところもさだかならず、かゝる地名を設けてよひべきにあらず、夏の朝あらしもあまりなり、下句如何なることゝも聞えがたし

磨。云、すゞしさを待取る風をいかで嵐といはん、此歌のいひなし、うたたね山といふ地名に、うたゝねをするこゝろを含めたるにや、さらば

朝うたゝねをせんこともいかゞなり、又寒しといはんはいはぬとありしを書きそこなへるなるべし、これは筆者の誤と見ゆ

布淑云、これは書損にはあらじかし、水無づきの朝嵐なれば、身にしむをも寒しとは云はで、心よしとる事におもふらん、といふの心ばへを云ひそこなへるなるべし

さて此歌主は題詠の歌のよみやうをばいまだ心得ぬにやあらん、朝納涼などいふ題は、一首の上に朝の心動かぬやうによまでは叶はぬ事なり、此歌朝嵐を夕嵐と代て、題を夕納涼とおしてもありぬべく

布淑云、これよく病に當れり

又初五文字を神無月とかへて、題を冬山家ともなしてありぬべし

布淑云、これは四の句をもとのまゝにては叶はず

あまりに浮きたる歌にはあらずや、初五文字に水無月とあるのみ夏

にて、二の句より以下何れの所にも夏の趣ある事はなし、いと〳〵拙し、さて又夏の事あらぬ詞にて夏と知らするよみ方もある事なれど、それは別よ手段のあることにて、長けたる人の業なり、かゝるてづゝなる口つきの人にはさるとりなしは爲しうまじかりけり、初學の人などは、かく働なき歌をよみいづとも、理だに聞えば、まだしき程の業ありとて許すべけれど、自はてりがに思へる人の、かゝる歌を歌ありと思へるは、淺ましき業なり

真足云、題は家々納涼、四の句いはぬなる由はやく聞けり、難者云「かくさだかならぬ名所を設出でゝよむべきにあらず」と、今かもふに、すべてふるき集どもに所の名をばよみて、今の世それを名所と云へるもの、多くはみづからその所に往き、たゞ何ともなき所なるをも、てにふれてその名をよばれつるものにあれば、とと

どと面白くよきけしきなるにはあらず、遠くまれ近くまれ、人のあまたいたらぬ國には、却りて今の世名所と云へるものに立優りておも白き所ども多かり、よりてしか今の世名所と云へるは、古歌に入り入らざるにのみかゝりて、さらに其所のよきわろきに預るにあらず、その中にも品を分ちて、名所の名所あらぬをも、多く歌によみつけたるをば、題詠にとり、ずとし耳どはきをば題詠にとらず、と云へるは、漸く二百年ばかりとあた一家の法式よて、公の論よはあらず、もし此局中を離れて題詠をひねり出さんに、とみに思寄りてその歌に寄せあらんをば、たゞ見えたる名ありとて、などかは取らざらん、いたづら言をなのたまひそ、また難者云「夏の朝嵐あまりなりとてはたゞわが家にのみすくみをりて世の中のとはじろきをば知らぬ論なり、やまちかき里あら

ばあつの朝なりとて嵐の吹くまじきかは、田舍人の云ふを聞くに、都わたりに見聞きなれつるとはいたく異ることと多くあるものなり、又いづくのくまにも常ある事にてさしもめづらかならぬ事なれども、心のいたり精からでその境を知らぬ人は、つゆ〳〵無き事なりと思ひて、うけひかぬことも甚多かり、これらはみな川の神の海を見たることのなきものなり、かく云はゞ難者は「たとひありともさる雅ならぬことは題詠にはよむまじきもの」と云ふべけれど、理のわらんかぎり、げしきのかかるまじき間は題詠なりとてなにかはきらはん、難者の末の條に云へる言をこれかれあはせみるに、一種歌よみと云ふ門を立てゝ、それが風情は世にとざまなるものに云へるをかしさよ、とはまたく今の世にからまなびと云ふものゝひとくさ門を成せるを羨めるものあ

り、また「すゞしさを待取る風をいかで嵐と云はん」と云へるは、如何に云へるにぞ、その心得がたし、今難者の意を推測るに、涼みたらん人にはしかざまにはげしき風を吹かせまじき、と云へるなるべし、とも近き世の法則にいたくはだされたるものなり、また夏の朝うたゝねせん事、そこらわたりのみやび人とおもひあがれるきはにはあらざらめど、とも世に絶えて無きこととよはあらず、されど晝間寢ぬることはよからぬことにや、孔丘といふひとにいたく爪彈きせられし人もあれば、この難ばかりは云はれたりとも云ふべからん、又題詠のよみ方とてなほ〳〵しく書つらねられたる事も、ちかき世の法則にいたく關れる歌人、また俳人あざいふものゝ專取りあやめる說どもにて、取ると取らざるとはかのがじゝの心にあり、すでにも云へる如く、一家の式をもち

て天が下なべて押さんとするは、精衛が海をうづめんとするに均くて、我これらの言を宋人の章甫になずらふものなり、おもふに今の歌主は袴のそば高く取りて、いかにもしてこの圍をはしり出でん〳〵とすなるを、難者は圍の中よひゝらきをりて、かれがふるまひの己に似ざるをかにかく云ふなるなれば、うらまへの逸の出來るも理なりけり、この難者たち親より縣居のまなび子にて、親く翁の敎は受けつるならん、さらばのちの世の敎つゆばかりも耳にふれず口よも唱へまじと思ふを、今論ろへることのその敎につゆばかりも似たることの無きは、かへすゞも訝きなり、こは吉益東洞が始めて古法を唱へいだしてより後、其流まあそべる者もなほ後世の法をも棄てがたくするに倣へるものか、はた山本信有が宋を尊みて王李が古文をしのぐと云ふ名

を談めるものか、はた捂紳先生の糟を嘗めてその糟に醉へるものか

知紀云、「朝うたゝねもいかゞなり」との難はいとも拙し、こは朝よわざとうたゝねしたるにはあらじ、月夜にすゞみすとて端近く出でゝうたゝねすること山賤のつねなり、さてうたゝねながら明放れて、袖にふき來る山風の氣味、寒しとも云ふべき事なり、涼しなど云はんは中々におくれたることなり、たゞ此四の句に氣味を云へること一首の眼目なり、すべて此難者たちのうたの心ばへを知らぬこと末の總論より辨ず、また山里ならば夏とても嵐の吹くましきにもあらず、こは眞足ぬしの云はるゝが如し

通察云、我みつる短冊よも、眞足の云へるごとく、題は家々納涼、四の句はいはぬとあり

七夕興

この夕とりあらしたるかぢの葉のたえまもさやに月ぞうつろふ

翁云、とりあらしたる俗語なり、一首すべて俗意なり

齋云、とりあらしたるとは、七夕にたむけの料にかぢの葉をつみとりて、こずゑの疎にありたるを云ふよや、こはいと心得がたき事なり、まづこずゑに月のうつろふさまを云へれば、此楮は大木なるべし、其大木のこずゑのあれて月のよく漏るゝほどになりなんには、いくらばかりの葉をつみたるにかあらん、星に手向けん料にはなゝひら十ひらにて足りぬべきにあらずや、あらしたると云はんばかりつむべきことかは、またわれのみつみたるにはあらで、よそびともつみとりてあらしたるなりと云はんか、されどこずゑより月の見ゆるを興したるあれば、此かぢは庭に植ゑたきたる木なるべし、さらばよそびとの

むらがり來りてつみとるべき事はあるまじきなり

布淑云、家にもとゝらの人住むべければ、一人のみつみたりとも見るべからず、これはあまりに難しすぐしたるなりけり

又道のほとりなどにある木よて、いづこの人も手毎につみとりてあらしたるなりと云はんか、さらば道のほとりにて七夕の興を催したりとせんか、七夕の興といふはむねと詩歌管絃などをいふことなり、花などめでんには道のほとりにて興ずることもあるべし

布淑云、あながちなる難にや

七夕の興は然らず、又小き木よて十ひらばかりをつみたるよて疎よなりたるを云ふと云はんか、もしさる木ならば、木の間より月のもれん氣色などあるべきやうなし、かゝれば此歌のいひなしは世に絶えてあるまじき事にて云いれぬ事あり、新き節を云はんとて、人の云はぬ事を云ひて作出でたれど、心の稚きまゝよ前しりへをも思ひめぐらさで理通らぬは笑ふべし

布淑云、一首をおもふに二の句を手毎に取りしとせばえかるべけれど、四の句は絶間の詞俗難あり、「ひまさやかよぞゆふ月のさす」とあらまほしくこそ、さて夕の字かさならば、初五を「けふよあひて」とよむべくや

異足云、難者云、とりあらしたる俗語ありと、あはれかくざまにあるかたくなしくはおぼすらん、いでその雅俗言のけぢめをいささか敎へまつらん、若ほれてはおはすらめど、耳糞を取りてよく聞きたまへ、もと雅言俗言を分つことはさらに無きことなり、世のくだつにつけて、その時をりに云ひもてはやすよしなし言のあれば、その言にむかへて、かりに上世の言をば雅とし、下れる世

のをば俗とは分ち云へるあり、いまの世よ云ひならせる詞あり
とて、なにぞは皆がら俗なるべき、たとへば「ふでもついゆるみて
ものの書かるゝ」と云へるついの詞は今俗と思へる詞なり、され
どもその元をとめ辨ふれば、書紀のつゝぞとあるより遷りきた
りて、さらよさとび言にあらず、又「なしがたき」と云ふを俗に「なし
にくき」と云へり、されど「わが手にはずゑにくかりし」とよめれば
これはたしかあらず、かゝる類限なくかはかるを、これらをも難
者は俗なりと云はんか、また俗意なりとの難あり、これもえさは
受引かず、天地に孕まれをりて歌によみ出でんほどの事を、假令
調はずとしたぢろくとも、いかで俗意とは云ふべからん、なにぞ
は難者のをかゝ云へる、いでそよすゑの條に云へることとありき、
その言に云へらく、歌に俗情あり、雅情あり、これをよく明らめん

よは、古のみやびをよく知るにあらざればたがふべし、不學未練
の人の我私の心に謀り、たゞその好む方に引かれてこれ俗なり
これ雅なりなどかもふは、皆當らぬことなり云々といへり（これ
は地藏が言よて、こゝに俗意なりと云へる人と異れど、同じ心よ
ものするにせ人たちなれば、こゝに今合せて論ずる者なり）これ
は人情ををるせるものにしたる說にして、ことに笑ふべし、古よ
り定まれる格ありてそれによらでは かなはざることのあらん
には、うるさけれどをかはは云ふべし、昔物部の雙松が朱意をあば
むとて、「私に權度を立てゝは計ることのあたらぬ」旨をば云ひけ
り、それは先王のみちと云ふものを論ろへるなればさもあるべ
し、これは人情の雅俗を云ふに、古をあてゝせんことあるべきて
をゝも覺にず、すべてこの難者たちはけしかる烏許人にて、戀の

歌をば難じて「せんすべとは云へど、せんにもすべと云ふことやはある」と云ひ、「又たゞすべなくとのみも云ふべく、また云はんすべせんすべあどゝ云へど、間に語を挾みて云ふことはなきことあり」と云へり、かゝるひがめは見る、萬葉の歌にゑかつゝけたれば、そるを」とあるをばいかゞは見る、萬葉の歌にゑかつゝけたれば、そが如くならざれば歌によむまじきと思へる、皆詞をもゑるせるものにあせるなり、さて此俗情雅情の沙汰は、もともろこしにて詩つくる上に云へることなり、今もさる人の口まねして云へるならん、されど其唐歌つくる人のゑか云へるも猥言にて取るに足らず、「唐やまとも風雅のかはることなし」と難者の云へるは殊更ひたるものにて、人情かはらざるはたれかは知りがたしとせん、されば萬葉集の歌三百猶の詩みな古人の具心より述べしも

のにて、この具心と云ふもの古人と今人と更にけぢめあるにあらず、もし古の人の情を雅とし、今の人の情を俗なりとせば、古の人のさぶしと云へるは雅にして、いまの人のゑか云はんは俗とせんにやさやうならん理い必あるまじきなり、こを押しておもへば、上世の人の云いざることなりとて、これをいかでか俗と云いん、大久米命の「などさけるとめ」をおして見れば、かみつ世の言もやがて俗なるものなり、かく云はゝ、風俗雅俗のわさを知らず と云ふべけれど、その雅俗の俗も風俗をはかれて何を云はんや、又「ありのまゝに云出づるは諸越人の直情徑行といふものにて賤し」と云へるもあたらず、直情徑行い世の常の身の行に云へる事にこそあれ、物の色を歌によみ出でんに預ることかは、うたはたゞ見るもの聞くものにつけてありのまゝを云ひ述ぶるぞ古

なる、これをのぞきてこちゝしきことを云ふは皆下れる世の
言にして、古よ立ち皈らんと思ふものはをさ〳〵取るべからず、
かの貫之主も女子のみまかれるをりに歌をよみて、さて云へら
く、かうやうのこと歌好むとてあるよしもあらざるべし、諸越も
こゝも思ふことに堪へぬ時の業と云へり、また西行法師も、詠歌
者對花月感動、三節備三十一字許也、全不知奥旨と云ひ、唐の尚書
舜典といふ書よは、詩言志、歌永言と見え、詩經といふ書の序には、
詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩、情動于中而形于言などあり
て、全くこちたき旨はきこえず、これらの旨を述ばへて近き頃小
澤蘆庵が「言の葉はひとの心の聲なれば思をのぶる外なかりけ
り」とよめるは僻歌ならんやは、また温柔敦厚は詩の教なりと云
へるは、經解と云ふ書に出でたる語なり、聖言とはいづれの聖の

言なるよや、これをしもひき出でつるは、うたを論ずるに何とか
や由ありげに聞ゆる語なれば、この語の意をよくも心得ず猥に
つみ來れるものよして、その解言をみづから綴り成せるもあや
なきものなり、温柔敦厚は詩の教に云へるにはあらず、されば、こ
の語をもちて今風情を述べん上にかけて云へるは、いたく人笑
へなるものならずや、この難者練磨の達人とみづから思ひはこ
れど、一として取るべきことはあらず、實よ闇の夜につぶてを打
つがごとき事なるものをや、さて山鳥の尾に書成せる長々しき
旨は、本居宣長が新古今集を評せし如く、みな理に屈したるもの
なり、去かもこれは其言あたれりとも見えず、わが庭に生ひ立て
る木なればとて、よそ人の來て取るまじき理もなく、また我家な
る多くの人の取るまじきにもあらず、此うたの理通らぬとてわ

らへるは却りて難者の心の通らぬありけり

いつはりの夕

來んといふを待たじといひし此暮のわがいつはりも苦しかりけり

翁云、來らんといふを待たずといはんやうなし、まことは待ちながら戯に待たずといへる意か、俗意なり、末句もいかゞ

麿云、待たじといひしは人のこゝろを引見んとての業か、それをうちまかせて偽とは云ひがたかるべし、いづれにもことば足らはで云ひかなへず、待たじと云ひしと云はんならば、試におどいふことばなくては聞えぬことなり

布淑云、此離よく云はれたり、近頃あづまうたとか云ふみやび集を見しに、此趣向ありし懸のうたのありしやうに覺ゆれど忘れよけり

貝足云、離者云、ちかゝ、今思ふに來んと云ふを心にはたのめるものゝ、其有樣よりては人の心を引見んためともおく、たゞに待たじといはん事のあるまじきものにもあらず、それをべうち任せて偽とも何のいひがたからむ、これらのうたを詞足らはず云ひかなへずなど云へるは、うおねがかひを作りてもの欲しみするよ、もちひに砂糖を包みてやれば、その砂糖をつゝめるを見てもこはうまからず、あの砂糖はしといひて、足をとゝと蹈みていよゝ泣くよ均きまが事なりけり

春云、此暮もたはふれよくゝ、今はありけり

知紀云、此うためでたし、來んといふを待たじと云へるは、女の心うちまかせてたのみがたき氣色のあるを見て戯のやうに待たじと云ひ置きしあり、されど實はおは其人心にかゝりて待たる

る故に、我またじと云ひ置きし僞言もあらはれにけり、と云へるにて、其心思ひやらるゝなり、かやうよ言外に意を含めたるうた、新古今などにあることとなり、初心の人の云ひがたきことなり、難者のやゝもすれば俗意なりなど云へることの辨は、奥にあるを見るべし

又云、異本「わがいつはりもあらはれにけり」

通泰云、桂園一枝(文政十一年成)には末の句あらはれよけりとあり

寄岡戀

しげをかの松に夕日のかくるれはいまやとまたん駒にくさかへ

翁云、今やまつらんとおもひやりて立ち出でんとするさまあらば、馬にくらいおけとはいふべし、くさ飼へとは云ふべきにあらず、一首荒涼

あることあり

麿云、三句わるき詞あり、かうやうの詞は心してつかはねば、をらべ損ずることあり、又駒に草かへもをらべわろし、古人の馬に鞍かけとよめるも、もとしらべきゝよくもあらざれば、まねぶべき事にもあらず、さて北どのゝ云はるゝ如く草かへは笑ふべし

布淑云、此難最よく云はれたり

真足云、夕日も隠るれバと聞けり、のとあるはうつし誤れるなるべし、難云しかく、これゝ東人のうたを都びとの難せんやうにぞありける、いかにぞならば、馬を飼はんやうを知らざる難なればなり、まづ馬にかゆ食ませんやうをばひとわたり聞かせまつらん、朝に一たび、午の時ばかりよひとたび、申の貝吹くほどに今ひとたび、さて夜よありてはかゆ食ひ盡さんほどをたて、かひに

やゞ計りて、三たびまでけに盛りかへて食まする、これおはやうなり、さていつよまれ外に出でんことの出來れば、まづかゆをはませて、さて乘出だすものなり、それまでの暇なき程ならば、そのかゆを袋に入れて、あるゝしはでにゆひ付け、またゝ從者に擔はせおどすめれど、妹がりかよはんに、しかあわたゞしくすべくもあらねば、先草を飼はすること、荒涼とは何ぞや、三の句詞わろしといふは、かくろへばなど云はゞよけんとおもへるなるべし、朝顔のうたを難じて、明けて見たればの句いとぎたなげなる詞なり、更にうたの詞のやうよも思はれず、とは見しかば、見つればなど云はゞ優るべし、どあげまきに物をしふる樣に云へり、「いつしかと明けてみたれば濱千鳥」「たゝくとてねやのつま戸をあけたれば」など見ゆるは何ぞ、これぞ此難者のわが私の心に謀りて、其

好むかたよ引くなるみだり言なるものをやすべて一首のとゝのひによりて、かのづから詞に緩急の出で來るをえ知らぬものゆゑ（ものなりとあるべしと知紀云へり）

春云、題にかゝはず

知紀云、この上句難あるし、草飼へのことと理あきにあらず、そは眞足ぬしの辨によく云はれたり、この難者まことの調を知らぬことと末に云へるを見るべし

通泰云、この歌柱園一枝拾遺（嘉永二年成）には「かの岡の松に夕日はかくろひぬいまやとまたん駒に草かへ」とあり、こは後に引直しゝあるべし、短冊には「をげをかの松みゆふ日もかくれば」とあり

、秋夕

物ごとよきけは悲しくみれはうしひとりあかるゝ秋のゆふべや

翁云、ゆふべやはゆふへよと云ふ意なるべけれど、きゝにくし、夕かあの意に夕かとは云ふべし、二三の句いと拙し

麿云、上の句の姿、世にわらはべの弄ぶいろは短歌といふものゝ詞によく似たり、かばかりに詞くだけて拙き調なるうたをば、ずこしうたに口馴れたる人はいひ出でぬものなるを、あまりに調といふもの辨へあきはいかにぞや、ゆふべやはゆふべよといふ意とみゆれば聞えもすべけれど、拙き姿あり

布淑云、此難實にさ覺ゆ

眞足云、難じて云へらく云々「たゝむいかだのすぎがたの世や」「はかなの夢のわすれがたみや」「はかなの露やひと夜ばかりに」などと云へるを難者は通發云、以下缺けたり、但わざとなるべし、○見させる夢よかいつらねて、れぼつかあからず云ひてんことの難きにはあらねど、牛と呼ばゞうしとれぼしたらん歌主のかたはらめになほりはえあらぬものゝ、思ひしづめてなん

知紀云、上句わろし、結句のやの詞、例多し、眞足辨ず

夜鹿

ねさめする長月の夜のあけがたよなく鹿のねはきかぬまされり

翁云、古脉によまんとてよめるあるべけれど、末の句つまりてよからず

麿云、末句万葉の古調にて、今みだりにまねび出づべきことばならず、万葉をとりてよまんには、かく調わろきたぐひをば棄てゝ、のびやかなる詞を取るべきなり、此えらびを知らでは、萬葉はまねびがたし、さて夜鹿といふ題をよまんに、なくこかの音はきかぬまされりとのみ

云ひては、あまりに味あし、鹿のねは哀を催すものにて、聞く時は、かあしと思ふべきものあれど、たゞひたすらに何のふしもあく、きかぬまされりと云ひ棄てんは歌人の情よあらず

布淑云、此難よく云はれたり

知紀云、下の句古歌に「都のうちはすまぬまされり」とあるに似たり、この歌よくもあらねど、例あきことにはあらず、元良のみこのうた「やればをしやらねば人にみえぬべしあく〳〵もなはかへすまされり」、業平のうた「くれぬとてねてゆくべくもあらなくにたどる〳〵もかへるまされり」、きかぬまされりとはあまり鹿の聲哀を催すよりて云へり「世の中にたえて櫻のあかりせば」とよめる心ばへなり

戸外朝顔

ねやの戸をあけてみたれは朝顔の花のさかりはやすぎにけり

翁云、二句拙し、一首俳諧といふものゝさまにて俗意なり

麿云、上の句のさま爲兼朝臣の「萩の葉をよく〳〵みれば」と云へるに口調よく似たり、すべてこの歌人のうた、かの朝臣のくちぶりによく似たるは、いとふべくわらふべし、彼朝臣のひが歌よみあるる事、そのかみより人もはやくいひあへるを、今かく言葉のまあび開けたる世に、なほ彼ひがうたぶりを學ばんとする人のあることそうたてけれ、あけて、みたれば、の句いときたなげあることばなり、さらに歌詞のやうよも思はれず、とは見しかば、見つればあど云はゞ、これにはるかよ優るべし

布淑云、この作者も見しかば、みつればなどやうの詞を心づかぬにはあるまじけれど、見たればは見てあればの略語たるゆゑに

置かれたるなるべし、此句きたゐしとていとはゞ、古今の「春がすみたたるやいづこ」あどいふもきらふべきにや、あまり詞えりをせば、後世のさだめにひとしくて、歌道いと狹くゐりなん、曲れるを撓めて直きに過ぐといふべし、ある人に聞けば、此初五柴の戸をとありしをなん、さらば閨の戸よりはよかるべし○爲兼卿は權大納言に昇進の人とおぼゆ、さらばその極官をもて爲兼卿と書くべきゐり、いかで殿上びとのあへしらひには書かれけん、さて此卿の歌をひがうたのやうに云へるは、そのかみ二條家冷泉家の人々のこの卿を誹りて云ひなせる詞にて、公の論にあらぬゐるべし、此卿のうたありてさのみ貶むべきにはあらぬをやされど此一二の句のいひあしてづゝにて稚き人のものいひのやうゐり、さて下の句に花の盛ははやすぎにけりと云はんに、上に其花の

盛すぎて起出でたる故を云はでい、歌の一首の上收まらず、そは人毎に朝顏のさかり過ぎたる頃にのみ起出づるものにあらねばゐり、若此歌花の句は今さかりゐりといふ歌ゐらば、歌はよからねど、たゞそのまゝにてもあるべし、其故は今盛ゐりと云ふはたゞ何の節もなき事なり、はやすぎにけりと云ふ時は一ふしあればなり、歌をよく味ひみん人は誰も此趣をば知るべきなり、此歌ぬしなどの如くおろそかに歌を心得たらん人は、がゝる細ゐるところには心づくまじき、事なれど、此味を知らではうたはよまれぬものなり

蒿蹊云、見たればの詞實によからず、しひて古風よせんとしてきたなく使ひたる、まことよしと云はんや、言えりまでもなし、見つればにてよきことを、惡樣に云ひてよきことかは

春云、二句あけていしみれば

知紀云、みたればの詞例多し、拾遺いつしかとあけてみたれば濱千鳥あとあることにあとのなきかな、眞足委く云へり、此歌もとよりよくもあらねど、みたればの詞古歌よしてはわろきことなし、必歌のよしあしいそこにあるものならず、一脉の作意にあるものなり、末よ云ふをみるべし、されど今の俗意もてみれば、優艶の詞ならねば、誰もわろしと思ふことなり、そはたとへば今の世の御家流といふ筆跡習ふ人の、唐流のそげたる所をみて驚くが如し

戀

いはんよもせんにもすべはなき物をやまぬや戀のこゝろなるらん

翁云、上の句はいとつたなし、せんすべとは云へど、せんにもすべと云ふ事やある

曆云、たゞすべなくとのみも云ふべく、又云はんすべ、せんすべなどもいへど、あひだにことばを挿みていふことはなき事なり、北どのゝ云はれたるが如し、學の業暗くて、かゝるみだりなる詞をよみいでなきて、此後萬葉など一わたりよみて、すこし物の心わきまへたらん時には、このうたぬしも後悔出來ぬべし

布淑云、よく難せられたり

知紀云、此上句の活用難なき事、眞足の辨あり

暮山松

すみ染のゆふべの山をなかむれば松のたてるもさびしかりけり

翁云、下句拙し、これも芭蕉風など云へる俳諧の意なり

曆云、新古今のうたくづありと昔より云へど、「殘る松さへ」と云へるはなほ趣あり、此うたいと味なくこそ、これも爲兼朝臣のうたぶりなり、

彼朝臣は不學暗識なる人にて、今の俳諧者流にことなる事なかりしなり、此うたを俳諧の意と北どの丶云はれたるは、甚あたれることあり

知紀云此甚の詞つかひやうわろし、茲はいとよく當れる事なりなど習くべし

布淑云、いかにも下の句は拙くてたゞありなるうたなり、用意なくてこの難を受けられしは實ども云はれざりけり、爲兼卿を誹謗する事傍若無人あり、これまでうたよみのあるまじき事ならずや

春云、二句非なり、夕暮の山のは遠くながむれば

知紀云、此うたわろきことなし、夕暮の山のは遠くと直したるは調うちゆるびて中々にわろし、たゞ景氣を云はんとて、調の活氣を失へり

通泰云、此歌桂園一枝拾遺にみえたり

寄衣戀

わぎもこがぬぎてかしつるした衣忘れぬものゝかへしかねつる

翁云、忘れぬは人をわすれぬにはあらで、衣を借りたることは忘れぬものゝながらと云ふ心ときこゆ、いと〳〵賤し

暦云、北どの丶云はる丶如し、四の句はいとゞ俗意あり

布淑云、此難最さることあり

知紀云、此うた俗意の難あり、とは無理あり、古歌などよく見るべし、この雅俗のこと末に委く云へり

總論 通泰云、原本此名なし、我假に補ひしなり

翁云、すべて此うたども皆俗情にて、うたの情にあらず、歌は雅びやかなるが上にもみやびなることをこそ思ふべけれ、かく俗情のまゝに言出づるをうたといふべきや、うたは心を種とするものなる事は論

あし、其心と云ふを、常のさとびこゝろの事と思へるよや、種とすべき心はみやび心の事あるをや

○齋云、うたは俗情あり、雅情あり、これをよくあきらめんは、古のみやびごゝろをよく知るにあらざれば違ふべし、不學未練なる人の、わが私のこゝろに謀りて、たゞその好む方に引かれて、是俗あり、是雅ありなど思ふは、皆當らぬ事なり、此歌人の心には、たゞうちかもふありのまゝを云出づるをみやびありと思ふにや、そは唐人のいふ直情徑行といふものにて、最鄙俗なる事あり、聖の詞に温柔敦厚は詩のをしへありとあるを思ふべきことなり、この温柔敦厚と云ふはいかにと云ふに、たとへば怨むべき節もたゞちには怨まず、誹るべきふしも直には誹らで、詞を婉曲にして、つたなき心をあらはさゞるを云ふなり、これこそ風人の本意なれ、この聖言を本として、風雅の趣をばさだむべきことなり、もしかくいふをとがめて、そは唐土の事まて大和ぶりならずと云はん人は風雅の情を知らぬなり、唐も大和もこれにへだてはなきことなり、この歌人かくて今より努つみたりとも、志すところ鄙俗なれば、遂には玉藻風雅のあらびたる言ぶりにこそ成果つべけれ、いと口惜き業ならずや

○布淑云、此總論よいたりては、我師に聞きおける心掟に違ひて、道のためもだしがたさに、聊雅俗辨を書い說きてはべれど、事の長さよ茲に殘す

筆のさが附錄

雅俗辨

小川布淑

此頃旅のつゝ〻て人の見せたるものゝ中に、歌よみの聞え高き二人のあづま翁の何くれと書ける中に、歌よまん心掟を聊ばかり論へるありけり、そを見るに、雅（ミヤビ）と俗（サトビ）とのわいだめを云へるわたりの、我師に聞置けるに違ひて、いとも心得られぬ事あり、見過ぐいてもありなんと思へれど、大凡敎といふものは、毛の末ばかり錯てば、千里を隔つゝといへば、我輩の爲もだしかたくて、短き筆もてかいつらぬるになん

彼一人の翁の「人の心を種」をあるは、常の俗（サトビ）心の事ならで、雅（ミヤビ）心の事なり、と云へるが、此道を損はん端ととそなるべけれ、そは如何よといふ

に、うたの根ざす所を書ける古今序の「心を種として」と云へるは、雅俗あゞ云今の世の樣にあてゝ云ふべきにあらず、上つ世の歌は、思ふ心を常のまゝよ云出でたるものよとそありけれ、されば萬葉集の頃までには、心にも詞にも雅からぬもあるべけれど、今の世にはことに聞ゆるは、眞心のまゝを述べたる故なり、やゝ世移りては、撰集あゞいふことの始まりて、心も詞も、さとびたるを落して、後よまん人の本ともあるべきを載せられたるなるべし、すべて心といふには、性情を兼ねていふなり、よみ出づるに至りては、心といふが情の字にあたれり、いはゆる、心ある人に見せばや」などいふ類なり、其情には、喜び悲むより歎へては七つも八つもあるを、事にふれて動くをいふ、人の世にある事業しげくて、この動くが止むまじければ、れのづから物にふれて聲に出で、其聲あやをなすより、歌とはなるめり、其情には雅も、俗もある

べければ、雅なる方をよしとしてとりたてゝ、俗なるをあしとしてけづりつゝ、ひたぶるに雅なる人を具の歌よみとせんこと、昔今變るべからず、雅なりとて花鳥風月に耽るをいふにはあらず、年□榮利とあるやうの品ならぬを云ふなり、さらでは平生の行にそむけて、己々がをわざに疎かる類のいたづらごとにて、中々風雅の罪人とやいはれん、古の代々の帝は、ある歌の上にて雅俗の情をみそなはしてこそ、さかし愚なりと知ろしめしけめ、雅情とて殊更に求め出でんならば、賢愚の性、言葉のよしとあしとにて知らるべからず、若雅と俗との心ふたつありなば、歌よまぬ時は俗意のみ差出でゝ、いと見苦きしれものなるべし、言葉の方にては、古くよりよみ來れるを、先はみやび詞として取立てゝ用ひ、今世に云常の言を俗語としてよまぬは、なべての詞も皆かはり〳〵てあらぬ云ひ樣よありもて行けば、其元に歸りて

みやびにせよとの教にて、いかにもして俗語は去らで叶はぬことあ
りかし
今一人の云へらく、打思ふありのまゝを云出づるは、直情徑行とて、唐
歌には賤むことにて、温柔敦厚を詩の教なりとある聖の語を思ひて、
恨むべき節もうちつけにハ恨ます、誹るべきことも直にはそしらで、
言葉を婉曲にして、拙き心を顯さゞるを旨とせよとなん、一わたりは
さるべく聞ゆれど、深く思へば、彼情ハさま〳〵に動くものなれば、
怒り悲む時の言葉、いかでか婉曲にのみ云はるべき、情を撓めてさら
ぬけはひにもてなさんは、却りてねぢけ人のすることになん、温柔敦
厚を詩の教との聖語ハ、詩書禮樂を論ろふ時の事にて、打任せてかゝ
らでは詩にあらずとは云ハれまじきなり、風人の心は唐も大和も均
かるべき理にて、情の動くに任せて、劇くも柔にも云出でんこそ、思無

邪とあるにも叶ふべけれ、此心用ひたまひて東人のさだめらるゝや
うならば、みやび心といふもの常に不用なるものにて、歌よまんとす
とて取り出でたる錦繡のかざり言にて、いはゆる狂言綺語に落ちは
てゝ、我大御國の神代より傳はれるやまとみことの道とは尊まれま
じきをや
戌の年霜ふる月の末つ方、卒爾に書けり、案だにつけねば、誤あらん
は重ねて正すべし、布淑

續雅俗辨

伴　蒿　蹊

江戸加藤氏の説に、「人の心を種と」するとあるは、常の俗でゝろの事な
らで、雅意の事なりと云へるを、小川氏は此道を損はん端とこそある
べけれと難ぜらる、こゝ近頃小澤翁のたゞ言うたと云ふことを唱へ

られしに基して、唯俗にまれ雅にまれ、思ふまゝの心を云ひ出づべしとなるべし、されば我師に聞置きしに違ひていとも心得られずとゝ云はれしならん、さて又云はく、古今集の序の「心を種」と云へるは、みやび俗などいふ今の世の様にあてゝいふべきにはあらず、上つ世の歌は思ふ心を常のまゝにいひいづるものにこそありけれ、云々、げにも古は雅意俗意と分きたるにはあらで、たゞ打思ふ意を云出づるなればこそ、花になく鶯水に住む蛙の聲をも歌よ准らへられけめ、然はあれどやう〳〵世下り人の心も賤くのみなりもて來ぬれば、今にしては此雅意俗意のけぢめも、いかにもあるべきことなり、詞も同く、あがれる世は雅詞俗詞のわいだめなかるべきを、今にしてはえらみあり、さらば詞は撰わり、意は撰ぶべからずとは云ふべからず、方に今聞きわたる方にも、これは俗意なり、これは雅情なりと思ふは、小川氏も亦然思

はれなん、凡今の人は必此境を慎まずはあるべからず、又云はく、みやび俗と意ふたつありなば、歌よまぬ時は俗意のみ差出でゝ、いと見苦きしれものなるべし、云々、茲よ至りてはれのが常に思へるに大よ異り、おのが思へるは、いかよも正く賤からぬうま人の心を心として、歌をよみ出で、その歌よむ心を常心に移して、邪あらじ賤からじとなしなば、立居起臥の我心、直よ歌の心となりて、さてこそ雅意と俗意と分れず、鶯蛙の聲をも即歌なりと云にもかなふべく、又歌は教の道てふ旨にも、小川氏の云へる思無邪と云ふにも當るべくや、又云はく、東人の定めらるゝやうならば、みやび心と云ふもの常には不用なるものにて、歌よまんずるとて取出づる綿繻のかざり言にて、所謂狂言綺語に落ちはて、我大御國の神代より傳はれるやまとみことの道とは尊まれまじきをや、以上、己をもて見れば、其歌よまんずるとて取出づる

綿紬の師言は直に俗意より出づべし、たよそ世の人の、歌の俗意なりと思ふは、大やう此錦紬綺語の間にあり、故(カレ)雅情俗情を辨ふべしと思ふあり、古人の心を古風に染めず、と訓へたまへるも、此雅情のことなるべし、老の手のかゝむを堪へて、取敢へずこれを記すは、雅俗の預る所常の心に打合ひて、深く慎むべきことゝぞと思へばなり

癸亥春正月

桂園一枝拾遺評

桂園一枝拾遺評

はしがき

桂園一枝拾遺の評は小林歌城の作にして、加藤行虎の隨筆の中に見えたり、大體に引きたる秋山光彦の桂園一枝評と見合せなば、興多かるべし

歌城一名を元雄と云ふ、江戸の人なり、光彦と同じく村田春海の弟子にして、弘化嘉永の頃世に名高かりし歌人なり、行虎は歌城の弟子な

り

桂園一枝拾遺評

小林歌城

春生人意中

のどかなるひとの心をえるべにてはるもや空にたちかへるらん

歌城云、四句やもじにの下よあるべきなり

初春鶯

あけぬからあくうぐひすは新玉の年よりさきにたちかへりけん

末の句立かへりけんと云へる、心ゆかず、鶯は、谷の古巣より春は立出でゝ人家近く來啼くものゝよも云ひ、暮春の比には古巣に歸るよしにもいふ事、古歌にあまた見ゆ、さるをこゝに立歸るとい

へば、心うらうへよなりて、いかよぞや聞ゆ、且あけぬからあくと云へば、夜のはど聲すといへるにて、鶯は夜より啼くものゝやうにていかゞ、又年よりさきといへば、初春といふ題意にも違へるやうに聞きあさる

早春河

みながみの高峰よりたつ春ならしゆきげみなぎる富士川のあみ

雪氣の漲るといへる、こゝろわりいかゞ

社頭子日

瑞垣のひさしきかげよひきうゑて小松あがらもかみさびにけり

かくいひては、今の子の日よはあらで、昔の事を噂にいふこゝろなりて、いかゞ

子日興

ひめ小松ひくや子日のをぐるまに若菜をさへもつみてげるかな

作意は、此車は子日よ行きたる人の乘りたるをいへるなるべけれど、つゞけがらわろき故よ、若菜を車よ積みたることゝありておびたゞしき樣よ聞ゆべし

松上霞

山のはの松はかすみよたちなれて我よはうとくなりよけるかな

三句は霞に立隔てられたる意と聞ゆれど、立馴れてばかりにては云ひかはせず

ふた木ともまつはわかれず武隈のはなわよたてる朝がすみかな

二句と五句うち合よろしからず

霞隔村

ゆふがすみふかくたてりのむら烏さわぐあたりや木末なるらん

二句何事にか聞分かず、耳遠きたてり村、詞によりて取出でたる
拙し

鶯

いかばかりのどけかればかうぐひすのあく一聲に春のたつらん
のどけゝればかといふべし

雪中若菜

うちはらふ袖の雪間もあかりけりさえ野の若菜いかでつまゝし
さえ野きゝあれず

水邊若菜

たゞす川つまれぬ水のふかぜりもその根はきよし神やうくらん
かくては水中に生ひたるやうにて、理いかゞ、且三句も文字も心
ゆかず

田若菜

大あらぎの浮田の根芹つむなべに杜のこのめもはるやたるらん
一首の意あまりよきは〳〵しくや

殘雪半藏梅

うめの花のこれる雪のひまごとよさきいでゝ匂ふ春はきにけり
雪のひまごとよと云へる、地上のやうよきゝなさる

窓梅

ゆふ月の影はすくあき窓のうちにみちても梅の香こそにほへれ
此も文字は下よかかもかなを結ぶべし、此集中にあまた此もあれど、大方此格にはづれたり、古歌にもをり〳〵此も文字遣ひあやまれるがあれど、例とはあすべからず、此事につきて云ふべき論あれど、こゝにはいはず

女の家ゑ男きたり、前に梅花あり

さく梅は色もにほひもあかりけりあさくも君よよそへつるかな

此さく梅といふ詞古くはいはぬことにて、一首も見ることなし、近來の歌にはあれど、古學を奉ずる人のよみいづべき詞にあらず

草庵春雨

かゝげみしをすの外山も雪きえて雨のどかなるいはのうちかな

一二の句、末の庵には似つかはしからず

海上歸雁

をりしもあれもろこし船に連りてまつらの沖をかへるかりがね

初句つかひやうたがへり

殘花少

のこりなき我世の春にくらぶればちりたる花はすくなかりけり

四句優ならず、猶いひやうあるべし

週日

ゆけど〳〵あは山のはの遠ければ空にやすらふゆふづく日かな

一首の意きゝわきがたし

瀧下欵冬

かはづなくさの山川にとすみて山ぶきさけりたぎつせごとに

瀧つせごとゑ山吹のさけりとは、さては水中にあらんやうに聞ゆ、いかゞ

欵冬露繁

山吹の八重はむぐらにならふらんいつわが袖のつゆになれけん

意たしかならず

春鳥

山がらのつゝく岡邊のうつぼ木のえだもひと枝はるめきよけり

初句に山がらとはあれど、此詞はうつぼ木に冠らせたるにて、一首にかゝらず、題意にかなはずや、且うつぼ木の一枝もこゝろゆかず

更衣

何をわくにはひあらねど取出でゝこゝろあつかしき夏ごろもかな

三句と四句との意打合はず

題ゑらず

いつよりも今年はながき春なりとゆたみすぎたるれそぎくら哉

ゆたみ、此詞きゝつかず

待郭公

はとゝぎすきかんと思ふに夏夜はまぎるゝ鳥の多くもあるかな

夏夜のみ鳥の多きこともいかゞ

沼菖蒲

あさか山影さへみにぬさみだれにぬまのあやめはひく人もなし

本歌い山の井なれば影さへといへれど、こゝには沼といへる、かなはず

五月雨暗

五月雨はけふぞまことにはれぬらん雲の八重山あらはれにけり

四句夏雲奇峯などいへるその事よや、こゝにはまことの山を云

ひたくや、又雲のを遠のとあらためたくや

竹間夏月

山かせのふきなびけたるくれ竹のかへればくもる夏のよのつき

ふきあびけたる不成語あり、本居がやちまたに、加行四段活に入れたるにて、あびかん、あびき、あびく、あびけと活くあり、若あびけたるとも云はゞ云はるゝ云はゞ、あげくをあげゝたる、あへぐをあへげたるとも云ふべけれど、さる事はあるべからず、此作者てにをは語格にうときこと、これにのみ限らず、あまた見ゆ

河夏月

かゞりびはたらむ川瀬にたきすてゝ鵜飼がともゝ月やみるらん

たらむ明方めきてきてゆ

鵜川

さきた川なみさへもゆるかゞり火は此世にみるもおそろしき哉

篝火とのみにては題意たしかならず、末句も曲本の詞にて、耳なれて俗にきゝなさる

雨後鵜川

あめはやみ雲まだはれぬゆふやみの空まちいでゝさす鵜舟かな

雨やみてといふべし、このまゝならば、二句雲はと云はでは調よろしからず、詞あまりてさは云ひがたければ、初句改むべし

原照射

みだれても鹿かふさまをもろこしの原のともしにかもひやる哉

一首のとゝのひたしかならず

蓮露

かたぶけばこぼるゝ露を蓮葉のおきためたりとかもひけるかな

おきすゑたりといふべし、ためは拙なり

閨中扇

ゆふべ〳〵扇のかぜにはらふかあたれをばまたぬ夜床あれども

下句なほ云ひやうあるべし

泉忘夏

うちつけに氷をむすぶとゝちしてあまりつめたき山の井のみづ

あまりつめたき俗あり

船納涼

松かげにとまらぬ舟もあかりけりあらしや夏のみあとなるらん

風といはまほしけれど、文字たらざるをいかゞはせん、嵐はすさましげに聞ゆ

夏述懐

ともすれば燃立つかびの下にのみくゆりがたきは此世ありけり

四句は俗に、下にてくゞいうてばかりはをられぬ、おどいふ意か、おぼつかなきとゝちすゝ

早秋朝山

涼くもけさぞきとゆるひぐらしのはやまが峰にあきやたつらん

すゞしくぞけさはきとゆると云ふべし、此まゝにてい初句も文字下に打合ひがたし、いかゞ

七夕水

たなばたのふかき契やうつるらん影みるみづのそこひなきかな

契は形なきものなり、もとよりうつるべき理あし、いかゞ

荻風

いかにうきをぎと風とは契にてふけばかなしきものとありけん

末句なるらんと云ふべきあり、けんにては過去になりて、いかゞ

雨中荻

ふりくらす雨のゑづくのさびしさをふきだにみたせ荻のうは風

ふきだにちらせといふべし

故郷萩

たかせどの尾上の宮のはぎが花よはふらんともえのばんやたれ

下句いひやうあるべし、四句も文字も心ゆかず

月前虫

つきてれる淺茅がうへに影みにてはねきる虫のてゑさやかあり

初句いかゞ、てる月のとすべくや

秋夕雨

大かたの人のなみだやふりくらんゆふべかあしき秋のむらさめ

秋夕雲

つくづくとながめいり日の影れちて色あき雲にあきかぜぞふく

此二首のみ歌めきてよろしくきこゆ

山家秋夕

あかつきに世の中よりもうかりけり山のいほりの秋のゆふぐれ

四句詞優あらず、外山の里のあさいふべくや

駒迎

あきの夜はふりはへてだに望月のこまはしかりしあふさかの山

四句はしかりしと云へば過去の事にありて、題意目の前にあし、

いかゞ

對月待客

わが心いくたびゆきてさそふとも。ちらでこよひの月やみるらん

二句三句ともにて詞きれたれど、意はきれずして下にかゝる故

よ、末句やと云ひてはてにをはたがへり

湖月

はるゝと志賀の辛崎あらはれてがゝみの山をいづるつきかげ

拾遺愚草さゝあみやちりもくもらずみがゝれて鏡の山をいづる月影

古寺月

明しもあれ檜原が上にありあけのつきいでよける鐘のゐとかな

前にをりしもあれと云へるに同く、此詞もつかひあやまりたり

三五月正圓

ちりばかり雲のかけたるきづもなしこよひとみがく月のえら玉

きづ假名たがへりきずなり

九月十三夜

おぼつかなたがよの後の月あらんみぬ秋までぞこひしかりける

題意よたしかならずきこゆ、かうやうよはいつのよの月をもい

ふべきか

鶴秋雁

狩人のとあみのせきもあるものをやすくもきぬる秋のかりがね

秋のかりかあと改むべし、このまゝにては四句も文字非あり

紅葉澤

もずのあく末のはら野をみわたせば一村はやしうすもみぢせり

末の野原といふべし、かくては詞優あらず

瀧氷

おちたぎりみだるゝ澤の一筋はこほりもえてそむすばざりけれ

おちたぎりいかゞたぎちと云ふべし

水鳥馴船

みづとりも船さす池のれもなれてれあじ蘆間をゆきかへるらん

らんとゝのひいかゝ

蘆間鶯

霜れかぬ蘆の葉がくれともねしてあけゆく空をしのあくらん

空を、空やと改むべし

狩場鍛

時しもあれ雪をくゝみていかり猪のたけるかりばゑ霰ふるあり

時しもあれ、つかひ誤れること前に同じ

事につき折にふれたる

とけてだに鯨さやれるえぞの海のこはれる冬をおもひこそやれ

鯨さやれる紀の歌詞此句にのみ取入れたる、耳たちてきゝにくし

ふるさとへかく玉梓をつてやらん折しもあれやかへるかりがね

此をりしもは先よろし、一二の詞つゞき心ゆかず

うらみてもたがひきやりし玉梓ぞはあれ〳〵てかへるかりがね

ゑらくもにたちまがへるは白雲のたちまがひたる山ざくらかも

無下にたゞごとあり

くれにけり早苗とる賤がをがさはら夕日の影もさゝずあるまで

三句きゝつかず、原字主あるゆゑに一首きこえず

家にしてけふはうたへる聲すありかど田の早苗うゑみてにけん

うたへるにてはかあはず、うたふと云ふべきあり

はるかにものりあまされてぶち駒の塀のそとにもいばえける哉

ねられねば舟ばたたゝきうたふ夜を水雞も聲をあはせがはある

三句と末句と打合はず、このまゝにては夜を水雞が聲を合はす

といふ意になるあり、いかゝ

おきくらす蟬のなみだやおちぬらん露こそみゆれ杜のえたくさ

ぬらん非あり、つらんと云ふべきあり、古今物思ふやどの云々の歌考ふべし

秋風のえのびくにかよへばやまつのえたばぞもみぢそめける

てにをは調はず

すゞしきを雨のなごりと思ひしはやがてもの秋のはじめなりけり

すみた川月も都の名にしおはゞとよひとひしきかげやとはまし

一首の意きゝわきがたし

にはたゝき垣根の霜をはらはずはかれたる草のいろもみましや

鶺鴒の尾にて霜をはらひて、始めて草色を見んこと、あまりにやうけがたき伊吹れろしにわさつまのかた山がくれ千鳥なくあり

何事にかきゝわきがたし

いかにねんわさてをぶすま打かつぐあふちの風もさむき此夜を

古事にてもありや、一首きゝわきがたし

ひとむらの氷魚かとみにて網代木のなみにいざよふ月の影かな

氷魚かと見にて、此てにをはのあつかひ後世ぶりにて、いやしげに聞ゆ、古くはなき事なり

よのうちにつくりし雪のけづりばな三世の佛はいかゞみるらん

つくりしいかゞ、つくれると云ふべきところなり

いかなれば柳木きるてふ山人のをのにありながら音なしのたき

初句末に打合ふべきてにをはなし、いかゞ、作者の意は初句、五句のおとなしにて結ぶなるべけれど、一首のこゝろたしかならず

おぼつかなきのふもけふも白雲のあとなきあとをふむ山路かな

初句と末句と打合よろしからず

ゑら涙の上をはしらす石つぶて沈まぬほどの世にこそありけれ

はしらする石つぶてと云はずしては、二句詞きれて三句よつゞかず、いはゆるかた言なり、又石つぶて、つぶて石と云ひたくや

山路だにさびしきものをおくとりの聲さへきゝもゑらぬ國かな

末句てづゝにきこゆ

すみの江の岸のまつかぜふきけらしあさかの浦に玉藻おみよる

吹きつらんと云ひたし

わさ澤の沼のまこもの墨をとりてこつまをとめは眉づくりせり

を文字はおきがよろし

みづ鳥におらぶうきねをかもふには舟こそ人のつばさおりけれ

は剩語

初戀

おほかたのよその情をみし日よりこひしき人におりにけるかな

いかゐる意かきゝわきがたし

遣車待戀

いかにせんかへりくるまは遲しとて妹がり駒もやられざりけり

のせてくるまと云ひたくや

忍等綠戀

ゑのぶ山てえんゑるべをゑら雲のよそのの上にもまがへてぞとふ

意はのかにてたしかに聞にず

寄山戀

ゑら雲のよそにそびゆるいてま山つれおき君があたりおるらん

此山にしも限るべからず

寄闘懸

いかにせんとゆればそよとときがめけり妹が雛のかるかやのせき

一首の意きゝわかず、三句けりも力なし

寄藻懸

潮みつるまさごがうへにみだれ藻のまた引方にあびきけるかな

みつるは非あり、みてると云ふべきあり、みつるは今満の義にて

てゝにかなはず

寄木懸

から山のから木が中にさくはなをもとむるよりもかたき君かな

から木が中に花をもとむとは何事にか、こゝろ得がたし、枯木の

事あるべけれど、一首のかたき君とはこなたに従はぬを云ふに

や、さる事をかたき君と云ふことわりいかゞ、とてもかくてもよ

くは聞分きがたし

題ならず

山賤がそともの岡の畑におふるからなたてゝもやまんとやする

一二のつゞき荒涼

もゝへやまへだつ都もみゆるかなこひのうへこす峯かなりけり

これもかた言あり、へだつる都と云はでは、詞きれて二句につゞ

かず

惜名懸

かばかりの情にかへてをしむかな何ばかりなるわが名なるらん

ばかりと云ふ詞、句をへだてゝ二つあり、

顕懸

夢がたりだにせぬものを何にかも思ひあはせて世にはえりけん

一二の詞つゞき拙あり

恨懸

いくたびかいひかへされて葛の葉のかさあるものは恨ありけり

初句いくたびかと云ひて、末の句ありけりと結べる、てにをはとゝのはず、いくたびもと云はゞ此も文字にて切るゝ故に、下ありけりにて調ふあり、かとありては切れざる故に、てにをはたがひとあるあり

別不知戀

いかにせん烟にだにもかへらぬは此世あがらのすがたありけり

きこえず

富士

風の上にたつ塵よりやつもりけん空にはあれしふじのたかねハ

はあれしいかゞ

あふぎみる雲井にゑろきふじのねの雪をときはのみはの松ばら

四句かくては、三保の松原につねに雪のあらんやうにきこゆべし

そらの海雲のあみまにはちすばのひるがへりたるふじのをば山

芝やま苦しげあり

三月十四日、立坊の供御、中山頭中將の君、奉行に參りたまひていたゞきたまへるを、其内四品ばかり、大御器あがらおくり下したまへるを、かしこくもいたゞきて

花さそふかぜうち山のふろしをばうけたる袖につゆさへぞちる

三句いひやう荒凉なり、又詞書のいたゞきいひざま俗なり

三位中將の君よりも